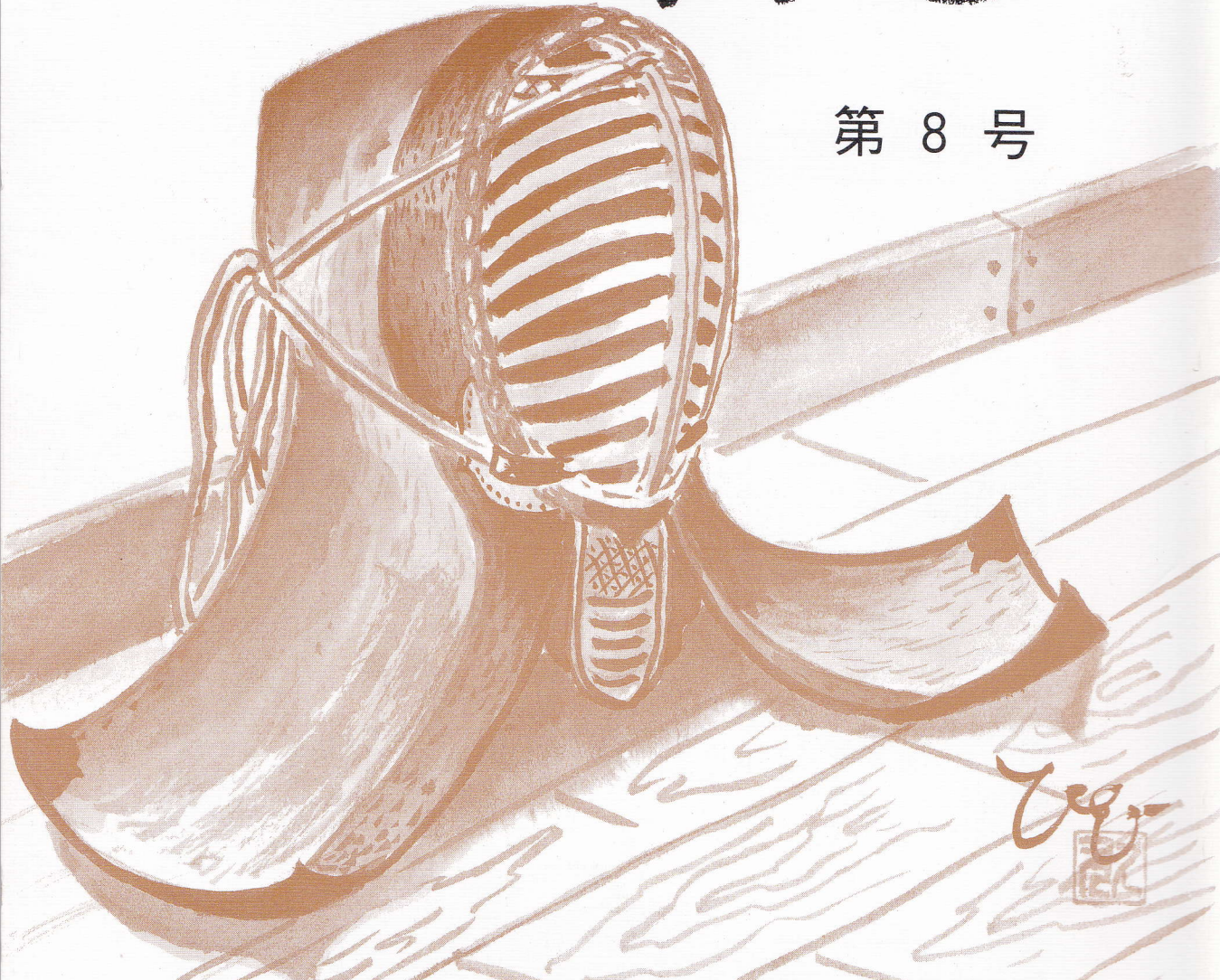


徳島市中徳島町2丁目96番地  
徳島県剣道連盟  
〒770 電話 (0886) 52-2337

# 徳島の 剣道

第 8 号



## 徳島県剣道連盟



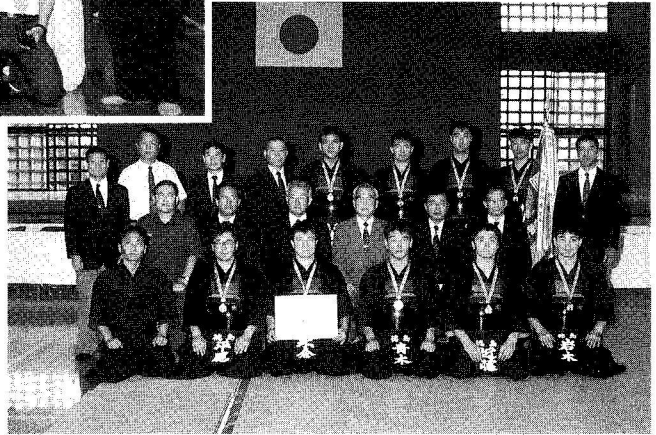
平成3年度全国高校総体に出場した阿南工業高校の選手



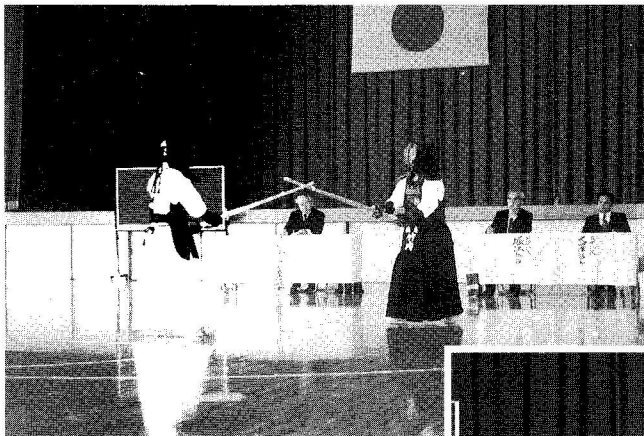
平成3年度第21回全国中学校選抜剣道選手権大会において準優勝した那賀川中学校の女子選手



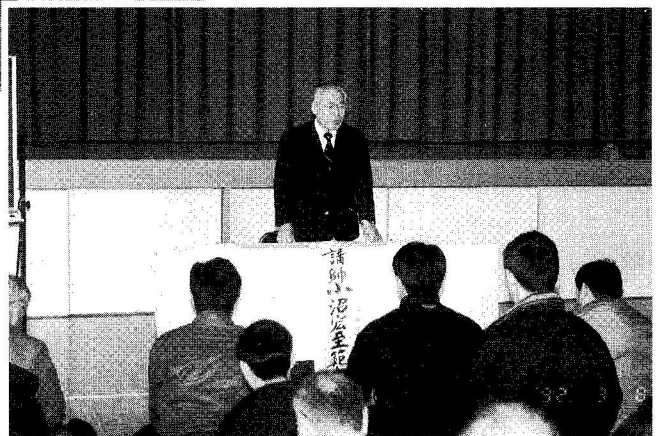
◀ 第33回全国教職員剣道大会において  
大学・高校の部で優勝した福多雅英  
選手と徳島県選手団



▲ 平成3年9月12日(木)に鳴門運動  
公園武道館において開催された四  
国管区内警察剣道大会で優勝した  
徳島県警剣道選手団



▲ 実技指導



▲ 範士八段小沼宏至先生をお迎えての  
剣道講習会 平成4年3月8日(日)

## 卷 頭 言

徳島県剣道連盟会長 堀 江 幸 夫

ある時道場で、私のこの竹刀の長さを知りたいがどうすればよいかと聞いたところ、即座に物差しで測ればよいと返事がかえってきた。ではここに私の作った物差しがあるから測ってみたらと差し出すと、これは駄目です、万国共通の物差しではないと正確な長さは測れないと言う、なるほどそのとおりである。

さてここで万国共通の物差しのほかに、もう一つ別の物差しが、私共の生活の中で大きなウェイトを占めているのに気付く。それは形のないもので、誰しもが使っているものだ。この物差し、言い換えれば自分の物差しで、我々は安易に物事を測って当然の如く納得し、時として他人にも押しつけて省みないことが平然として行われていることに今更ながら驚くのである。

私共の剣道社会を例にとってみても、その浅い修業と経験にもかかわらず、剣道万般にわたり、したり顔をして自分より大きな物差しの人の話に耳を傾けず、時として敬遠したり、反論したりと自分の物差しに過信して、その物差しの小ささに気付かず、また大きくする努力を怠っていないだろうか。この別の物差しは一定不変でない、時として大きく変化、成長するものである。

分け入っても果てしない深く広い剣境に少しでも近づこうとするためには、この物差しを大きくすることからはじめなければならぬと考える。豊かな人生も剣の醍醐味だごみを味わうのも、この別の物差しが大きければ大きいほど豊かで味わい深いものとなる。少しでも早くここに気付くことが大切ではなからうか。

# 目次

巻頭言……………会長 堀江幸夫

わが郷土の剣豪紹介(各支部より)……………

スポーツ外傷 特に「剣道とけが」について……………

貫心流剣術佐藤忠右衛門の傳書(二)……………

原士と剣豪……………

剣道随想 土方歳三―縁の地を訪ねて……………

誰でも参加できる稽古会「知友会」……………

一生懸命私の剣道……………

雑感……………

小松島市立武道館・武道の殿堂完成……………

人物紹介(各支部より)……………

新人紹介(各支部より)……………

徳島の剣道(各パートからの報告)……………

第33回全国教職員剣道大会に出場して……………

第36回全国高等学校総合体育大会に参加して……………

全日本女子剣道選手権大会に出場して……………

第13回全日本高齢者武道大会等に参加して……………

第21回全国中学校選抜剣道大会に出場して……………

第26回全日本居合道大会……………

伊原秀文先生を思う……………

故富永利男先生を偲んで……………

逝きし故藤野又次郎剣士を偲んで……………

平成三年度各種講習会参加状況……………

平成三年度戦いの跡……………

平成三年度昇段者名簿……………

平成四年度剣道・居合道昇段審査学科試験問題・解答例……………

平成四年度徳島県剣道連盟役員一覧表……………

平成四年度徳島県剣道連盟行事予定表……………

平成四年度段級審査実施計画表……………

徳島県剣道連盟審査資格・審査料等……………

編集後記……………

85 84 83 81 72 51 48 39 37 36 35 35 34 33 32 31 30 29 26 24 21 20 19 18 18 16 12 10 6 1

△表紙▽

題字 堀江幸夫徳島県剣道連盟会長

絵 香川久次徳島県剣道連盟理事

# わが郷土の剣豪紹介(各支部より)

## 〈徳島支部〉

### 修道館館長 剣道範士 吉本彦吉

(明治二年〜昭和二十年七十六歳卒)

徳島支部長 馬場 力

故吉本彦吉先生。この方がどんな仁かなと、私が興味を持ち始めたのは、今から約十年前からのことです。

昭和五十七年七月十一日、鳴門総合運動公園武道館で剣道六段昇段審査が行われた。地元の剣士が待ちに待った、いわゆる地方審査です。全国各地から受審者が大勢集まりました。地元徳島の剣士にとっては、昭和三十五年以來二十二年ぶりの地方審査なので資格のある多くの剣士が、昇段を目指したものです。当日昇段を認められたのは、その日、体調の良かった数名の人達だけでした。その時、私

の目で見て高齢受審者中、抜群の出来と見た、中谷智好先生がみごと合格されました。そして中谷先生と年齢の差はあったが、同じ道に志す二人は手を取り合い、おめでとうと抱き合い喜び合ったものです。その日から二人の親交はより以上に深まりました。



写真1 吉本彦吉範士

その後、二人が逢えば必ず吉本彦吉先生のお話やら、魚市場の道場での剣道の稽古、武者修行のことなど楽しく聞かせてくれたものです。数年前から創業嘉永五年の老舗、日の出楼の上品な奥さんから、私の親戚に当たる吉本彦吉さんは剣道の達人でよと、上手に手真似しながら再々聞かされどんな剣風であったのだろうか、益々強い関心を抱くようになりました。そんな時剣道連盟から「徳島の剣道」に載せる郷土の剣豪についての原稿を依頼された。第一に頭に浮かんだのは言うまでもなく吉本彦吉先生であります。早速にとペンを執ったが、中谷先輩はすでに無言の人となり数名の先生方に情報をとお願いに参りましたが、お答えはみな同様で「何分にも昔のことであらう」に始まって、「その時の徳島県の剣道界では吉本彦吉先生、近江佐久郎先生が双璧であって、とにかく立派なお方です。剣道についても献身的に努力され、今日の隆盛あるのは先生のおかげと言っても過言ではありません。その証拠に昭和二十何年頃だったか盛大に徳島剣道連盟が追悼式をしたように思う。」と言うお話をした。今一つ物足りなく、と言っても当てもなく途方に暮れていたやさきに、吉田租先生から朗報を戴きました。私と同じ八万町に吉本先生のお孫さんに当たる人が住んでおられるとのこと。他の情報では昭和町とか富田方面と聞かされていたのが意外にも、昔から燈台もと暗しとよく言ったものだと思ひ早速おたずねしました。道子さんというお孫さんに当たる人で敬慕する先生の血筋らしく、いかに、上品、優雅なお方であり快くお願いを聞いて下さいました。以下は道子さんのお世話で、横浜在住の兄君吉本公一様から頂いた資料を私が取りまとめた先生の略歴であります。

剣道範士 吉本彦吉先生は、明治二年二月五日、蜂須賀藩国家老賀島氏の馬術師範であった貫一を父として徳島で生まれる。明治維新による武士階級の没落の

### 表彰状

吉本彦吉殿

本會徳島縣支部設立以來四十數年間同  
支部剣道教師として多年徳島縣本學校  
官術・剣道範士として多大の力を盡し  
一ツも道徳隆盛を為す武術研究會ヲ組織  
スル等頗る私ヲ感佩スル等武術振興上其  
功績著し仍本會名譽會員トシテ本杯  
一組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

昭和二十年八月一日

大日本武徳會總裁

大勳位守正王

大日本武徳會長

若狭國丹波郡新井村本貫大野

写真2



写真3



写真4

後、辛苦の末、富田浜側で魚市場を創設、のち徳島魚市場社長、小松島魚市場顧問となる。この間にも剣の道を忘れず、無念流の中田義則先生、山根正雄先生から貫心流、内藤高治先生から北辰一刀流と各流派の剣術を修得する。自宅内に修道館を開いて従業員に剣道を教えたほか、夏には恒例の土用稽古、県外の名剣士を招待し剣道の奨励向上に努める。招待剣士の中には高名な小川金之助先生の姿もあったという。明治四十一年から大正十三年県立徳島中学の剣道教師を務めた。県立農学校、歩兵四十三連隊、武徳会徳島県支部の教師にもなる。昭和三年剣道教士の称号が与えられる。大日本武徳会徳島県支部長、徳島県剣道研究会初代会長となる。昭和九年体育功勞により文部大臣表彰、十三年には武徳会から有功賞が贈られる。また歩兵第四十三連隊に道場を寄附する等のこともあり師団長の交替の折には御挨拶や揮毫を頂いたりしていたという。先生の剣道の志を受け継いだのは娘婿の故高島永吉範士で、そのお孫さんは、剣道教士七段高島稔之先生で、現在、徳島市の中学校教頭として活躍しておられる。

先生の剣風は高島範士の華麗敏捷な太刀さばきと異なり動きの少ない、地

味ながら気魄のこもった威厳にみちた姿勢で千変万化の技の出る構えと  
思います。吾よく人を打つに非ず、  
彼自ら打たるるなりの心境の完成が  
出来ていたのでしょう。静かな動き  
の中にも、兵法は術にあらず、人の  
道なりと。

修道館道場では、剣豪藤川一太郎先生なども指導陣に加わり先生在生中はすでに、族の段数だけでも三十数段にのぼり、なお門弟中に、故中谷智好教士六段、その他多数の剣士を輩出していることはよく知られたところである。

## 追授ス 剣道範士ノ稱號ヲ

吉本彦吉

昭和二十一年七月十日



写真5

昭和二十年八月一日付で、大日本武徳会総裁(守正王殿下)より表彰状(別添写真2)を頂いたが同年十一月二十五日永眠(写真3、4)。戒名は「一剣光院高德義翁居士」である。

昭和二十一年七月十日付で剣道範士の称号を追授される。(別添写真5)  
昭和二十五年秋に徳島剣道連盟により追悼式を行う。

### 付記

令孫道子さんのお話によると家庭での先生は厳格でありながら慈愛にみちた静かな祖父さんであったという、先生の剣風に通じるものが感じられる述べである。それについても私の知りたいのは、若き日の先生のことである。

宮本武蔵が「竹やあん」と又八や、お杉ばあさんに呼ばれた時代があったように青少年時代の先生の実像である。

「剣道の振興」と「社会奉仕」を信条として、厳しく謹厚に生きた偉大な先生をもっと詳しく調べて顕彰してくださる人の現れることを願って筆をおきます。

## 剣道教士 浜谷 晋

県剣道連盟顧問 竹原 常雄

先生は明治二十六年五月三十一日、剣道教師故浜谷爲三郎先生の長男として徳島市富田浦町に生まれ、幼時より剣道の道に入り大正二年三月徳島工業学校染織科を卒業、家業の米穀商を営むと同時に爲三郎先生創設の義揚館道場の運営にあたられた。

義揚館道場は、最初栄町に借家を打ち抜き十間で稽古したのに始まり、後大正の中頃門弟相寄り秋田町の本宅裏に三間五間の道場が作られ、当時県の武道教師として赴任された、故越前秀之丞範十九段の青年時代、ともに稽古に励み近隣はもとより遠く勝浦郡、坂野証等から同好の青年が参集師事したほか、歩兵第六十二聯隊の上級下士官の隊内での錬成場として常に四、五十名の兵隊さんが名を連ね交替で稽古に見え、戦前徳島市内で最も弟子の多い道場であった。(余談 越川先生が昭新町の某華家の二世の美人を兄初め、浜谷先生が若年ながらお世話人となり縁談をまとめ、この機に越川先生は大坂に転勤し、後任に故高島永吉先生が来られたのも何かの縁であったと思われる。)

先生の剣歴として大正六年剣道初段に始まり、昭和十二年教士、昭和十五年六段、その間、大正十一年母校徳島工業学校武道教師、大正十三年大日本武徳会徳島支部助教、大正十四年同教授拜命、昭和十四年第四十回青年大演武会審判員(以後引続き)、大正十三年七月一日大日本武徳会総裁大勲位坊四級邦彦王より『第二十八回武徳祭の演武衆中に於て其術の精練なるを表せり、依て之を証す、』との表彰を受けている。

得意技としては浜谷の飛び込み面として恐れられていた。先生は人情が篤く温厚円満な人柄は母校剣道子弟その徳を慕い、義揚館道場主としては美人の誉れ高いかつみ夫人との篤篤の情はひいては門下生一同の身邊の世話までされたことは面見のよい先生として有名である。

以上の如く徳の高い先生も終戦も間近の昭和二十年六月秋田町への爆撃は浜谷家を直撃、不運、先生は倒潰家屋の下敷きとなり頭部及び諸内臓損傷、



昭和17年10月頃(50歳頃)

加えて翌七月四日の焼夷弾被災のため法化の奥さんの実家に寄寓、後道場跡に新築した家屋に落ち着き療養に専念されておられたが、日を追うにしたがい病状悪化の一途をたどり、御家族、門弟一同の願いも空しく昭和二十三年二月九日夭折されたことは悔やみても余りあり、時に先生享年五十六歳、法命心田院八識慧乃居士、徳島市勢見町観音寺に静かに眠る。嗣子浜谷武氏は東京に現住。徳工業揚館当時師事した門弟は現在県剣道連盟所属竹原常雄、三木只雄、山田新六郎、稲木紀一、竹原実太郎、高松実、石山安、福島栄治の各氏である。

# 〈丹生谷支部〉

## 吉岡峻次先生

吉田 祖

剣道錬士五段

那賀郡相生町花瀬

大正十三年十二月二十五日生

昭和六十年一月二十三日卒 六十歳

昭和十二年 日野谷西尋常小学校卒業

原貢一先生に剣道を学ぶ。

昭和十七年 海部中学校卒業

浅井真一先生に剣道を磨かる。

昭和十九年 台湾師範学校卒業

満州より台湾に移駐し展開していた第九師団歩兵第七聯隊

(金沢)に入営し台湾の防衛に当たっていた。

昭和二十年 復員

昭和二十一年 桜谷尋常小学校

昭和二十二年 新制宮浜中学校 六カ年

同 二十八年 日野谷中学校 四カ年

同 三十二年 鷲敷中学校 二カ年

同 三十四年 加茂谷中学校 二カ年

同 三十六年 宮浜中学校 四カ年

同 四十年 那賀川中学校 三カ年

同 四十三年 新野中学校 二カ年

同 四十五年 退職

同 四十七年五月

同 五十二年三月 相生町議會議員

以後悠々自適

以上が吉岡先生の略歴である。

剣道の指導者といわれる中に、三つの型がある。その一は剣道を奨め、竹刀の持ち方から教え、剣道を好きにし、ルールに乗せる指導者。

その二は剣道のルールに乗ったが未だ初心者と言われる人をより強く、より高度に指導する先生。

その三は指導者を指導する先生。

吉岡先生は、その一の型の指導者である。剣道人を作るメーカーの天才であった。日野谷中学、加茂谷中学では剣道部を作り、鷲敷中、宮浜中、那賀川中、新野中学では剣道部が出来てまだ日浅く、すべてが整っていない所、授業を終えた教室で机を廊下に出し、そこを道場代わりにして稽古をし、防具にしても竹刀にしても揃っていないのを苦勞し、調達して部を拡げて行き次々と剣道生徒を増やした。

吉岡先生は情熱の「塊り」であった。昭和三十二年冬鷲敷町百合に振武館道場が出来、翌三十三年より四十五年頃まで、毎年七月下旬に一週間に亘る合宿をしての上用稽古をした。吉岡先生は各中学校を誘い百数十名が参加し技術の向上を目指し錬磨した。

遠く鳴門、徳島、阿南より高段の先生方が指導に來られ、体から汗というより塩が噴き出る程の稽古をした。夜は吉岡先生得意の発想縦横の「肝だめし」をして合宿を楽しんだ。年毎に先生に引率されて参加した思い出の多い方が沢山居られると思うが新野中学校よりの新野哲朗三段や磯田五段などは記憶に新しい。

当時の丹生谷の中学校は皆が燃えていたので大変強く県下に名が通っていた。吉岡先生が丹生谷を出て平坦部の中学校へ行つてから、何とかして平坦部のレベルアップをしようと考え県南剣道大会を始めた。名の通り県南だけの中学校のレベルアップの大会である。当初は丹生谷の中学校は参加させない、と言って、一年に二、三回大会を催し切磋琢磨した。やがてそれが実り、丹生谷参加解禁になった頃には互角になっていた。

吉岡先生の夢は大きく、昭和四十年三月には茨城県水戸東武館での全国少年剣道錬成大会に原田、近藤、綱島、南川、入江君など十名で五泊六日の武者修行に参加した。その気概と情熱には誰しも頭が下がった。



吉岡峻次先生

ここでの収穫は大きく「一剣の心」を学び、水戸人の文武不岐を体験し、古きを尋ね新しきを知り、純粋な愛国の情に打ち震えたと書き残されている。剣に一段と開眼した先生は翌年も生徒を連れて水戸東武館の全国錬成大会に参加した。かくして阿南、那賀の中学生の剣道は飛躍的に向上し、剣道熱も一段と熱いものとなった。

「私は剣道家である。剣道家である前に、私は指導者である、学校教師である。私がいよいよ剣道家であっても、私の教えた子供達には素晴らしい剣道家、ひいてはすばらしい日本人になってもらいたい気持ちで一杯である。」と、情熱を傾けて指導者として学校教員として寧日なかった。が、何を思っか昭和四十五年、その教職を突然退職してしまった。そして、二年後には相生町議会議員に選ばれ、郷土の政治に力を尽くした。

氣宇壮大にして情熱家、常に理想を追い続け断固として実行する人、それでいて涙にもろく情けに厚かった。酒をこよなく愛し、酒仙人を以って任じていた。正に大器と言うべきか、豪傑吉岡峻次先生も病魔には勝てず昭和六十年一月二十三日故郷の山を眺めながら土に帰って行った。奇しくも、その日は年がかわれど敬愛する恩師山家雪藏先生の命日だった。

# スポーツ外傷

## 特に「剣道とけが」について

阿波郡支部 笠井 選

### 1 まえがき

昭和62年夏であったと思うが、西部地区少年剣道教室指導者講習会で、右記の題目で話すことを坂本支部長より請われて、4～5冊の専門書と整形外科スポーツ学会に発表された抄録を参考としてまとめ30分程話したことがある。

その後、再度これを文章にと依頼されて、当時の資料をもとに多少の補充を加えて文章とした。ただ気になるのは、原稿が4年余り前の古いものだけに引用した統計がすべて古典的なものとなっているが、専門的な紙面でもなく、要は常識的なものであれば、大した誤差はないだろうと思いつのまま用いることとした。

### 2 序 説

最近学童の突然死とかまた骨折や「けが」が多いと言われているが、突然死は年間一二(一三)体位で、約20万人に1人の割合でスポーツによるものよりも不慮の災害死が殆どであり、この内には心臓とかまた血管系、或はホルモン特に副腎皮質ホルモンの異常等基礎疾患のあるものが含まれているであろうことは、考えられ、これ等は重篤な学校健診で、発見出来るものでもなければ、これ等をおこなって、スポーツやクラブ活動に責めを持たすのはいささか酷と言わねば、多くは現在の社会生活に基きするのではなからうかと言われている。

我々の子供の時は、夏であれば吉野川や近所の池で泳ぎ、冬は川原や野原の枯草に火をつけたり、木の果実を登って取り、戸外で自然との遊びによって自覚しないままに、自己防衛反応を身につけたであろうが、現在では自然との遊びは皆無であり、従って不器用な自己防衛反応の退化した身体となり、また車社会によって登下校さえも車での送迎となれば、全て徒

### 3 本 論

10年余り前であったが、ある週刊誌に「頭のよくなるスポーツ」として、発表されたもので、第一に剣道が挙げられていた。我々としては誠に喜ばしいことではあるが、これは俗な週刊誌の記事であり、この因果関係については、未だ医学的には明らかにされていない筈である。正直言って、私の周囲を見ても残念ながら肯定し難い様に思える。

しかし、外傷の少ないスポーツであることは、医学的統計上、既に明らかにされていることであり、スポーツ安全協会の調査によれば受傷率の0・3%と言われている。

以下既に発表されている統計を、孫引きして項を進めてみる。

- (A) 剣道のみでなく、一般的なスポーツ外傷の原因とされているのは、
- (1) 不合理な食を中心とした日常生活
- (2) 不適合な練習方法
- (3) 過度の練習

であり、「表1」「表2」の調査が報告されている。

また主なスポーツ障害

理由	部位別	肘 (n125)	膝 (n44)	足 (n72)
過度な練習		40.0%	28.6%	33.3%
不適當な練習		30.4	4.0	6.9
不注意		7.2	8.2	19.4
不可抗力		7.2	20.4	12.5
乱暴		1.6	6.1	1.4
疲労		0.8	6.1	6.9
不明		12.8	26.1	19.6

〔表1〕 スポーツ外傷、障害の発生原因 (小学生)

〔表2〕 スポーツ外傷、障害の発生原因

	中学全体 (n:1726)100%	高校全体 (n:2063)100%
疲労	7.9	20.5
睡眠不足	2.1	1.7
不注意	24.4	21.2
急に練習を始めた	9.5	11.4
練習しすぎ	14.5	16.9
むずかしい練習	3.5	3.2
天気が悪かった	1.6	1.5
グラウンドや体育館が悪かった	4.7	4.1
ルールを守らなかった	0.8	0.7
用具が原因	2.2	1.9
不可抗力	6.1	16.1
わからない	16.2	17.8
その他	12.7	13.7
無回答	19.2	2.2

〔表3〕 主なスポーツの障害発生の割合

	小学生(n572)	中学生(n2035)	高校生(n1089)
脊椎分離症	0.9%	16%	1.3%
野球肘	13.3	6.5	1.5
肩痛	5.6	0.7	3.6
膝痛	3.3	5.1	5.1
オスグートシュラッテル氏病	6.2	6.9	1.3
踵骨々端症	5.4	0.9	0
足痛	3.7	8.1	3.8

- の発生部位と年齢の関係については、一表3の調査が報告されている。
- (B) 我々が剣道の稽古、または試合に於て見られるもの、また、起こり得べき外傷を挙げてみると、
- (1) 頭部打撲傷及び脳震盪症  
(特に仰向けに倒れた場合)
  - (2) 鼓膜損傷(横面を打たれた場合)
  - (3) 顔面及び目の刺創、擦過傷及び目の異物  
(竹刀の破損及び手入不足)
  - (4) 頸椎及び腰椎及び椎間板損傷

- (小學生には殆どなく、中学生には案外多い。これは、きびしい稽古による筋肉性のものと、腰椎分離症によるものがある。
- 高齢者には多いが近年による、骨や靭帯の変性変化が原因であれば、今更、致し方ないと言える。)
- (9) アキレス腱断裂  
(下肢の剣道外傷では、最も重症と言えるだろう。跳躍力の少ない若手者と高齢者は殆どなく、高校生から50歳以下に多い様である。私が経験し加療した例でも一人は徳大医学部生、一人は高知医大生(当地合宿中)一人は高知での西日本勤労者大会での20歳代の人であった。)

- (8) 腰痛  
(頸、腰の過度の前後屈した時、或は強い体当たりを受けた場合に起こり易い。学童では殆どないだろう。)
- (5) 頸部、胸部の打撲(肋骨損傷)及び皮下出血  
(突きまたは倒れた場合)
- (6) 上肢の関節痛及び手指の腱及び腱鞘損傷及び炎症  
(肘痛は比較的高齢者に、手部の腱及び腱鞘の炎症は中学生に多いようである。単純なつき指は、やはり若手者に多いのではなからうか。)
- (7) 膝痛  
(〔表3〕では、オスグートシュラッテル氏病と膝痛を区別しているが、小学生高学年と中学生特有なもので普通膝痛として表現されているし、また、その中に含まれている。特に剣道とは無関係である。後述の慶応大学の発表のデータでは剣道の高齢者では、肘に次いで膝が多いが、これは加齢による関節内及び周囲の靭帯や軟骨の硬化・変性によるものが多い。)

(10) 足底の皮膚剥離

（中高生に多い様である。高齢者の右踵部の冬期の「ヒビ割れ」があるが、これは入浴後厚い皮膚をけずり取り、油性の軟膏の塗布を1週間に1回位続けければ予防できる。）

(11) 踵骨痛

俗に、かかとの痛みであるが、小学生高学年から高校生、特に中学生に多いが骨端線の残っている、発育期特有のものである。また、手足の骨折も殆どないが、絶無とは言えない。）

以上位が一応考えられるが、障害の分類法が異なってはいるが、他のスポーツと比較した「表4」が発表されている。

(C) 次に高齢者剣道スポーツ障害について

整形外科スポーツ研究会に於ける昭和62年発表のものを抄録より転用してみると、次の如きものがある。

(1) 埼玉医大整形外科発表のもの

- (a) 年齢 30歳～80歳、平均 53歳、平均経験 37・1年
- (b) 8段 21名、7段 69名、6段 11名、5段以下 13名、平均段位 6・8段 114名

- ① 負傷経験者 76名 66・7%
- ② 負傷なしで痛みのみ 51名 44・7%（腰、肘、足底、踵）
- ③ 後遺症のあるもの 41名 36・0%（肘の痛、運動制限 58・5%）

- ④ 負傷部位 下腿（アキレス腱を含む） 21名  
足～足趾 17名、手指 10名

(2) 慶応大学整形外科発表のもの

- (a) 年齢 30歳代 20名、40歳代 18名、50歳代 14名、60歳代 9名
- 30歳～73歳 平均年齢 46歳
- 計61名

(b) 傷害のある者

- 30歳代 17件、40歳代 16件、50歳代 12件、60歳代 3件

		骨折	捻挫	脱臼	打撲	挫傷	切削	他	疾病	計	比率(%)
部	体 育	1,473	1,978	58	466	322	56	140	104	4,577	34.8
	バ ス ケ ッ ト	450	866	29	121	95	24	48	49	1,682	12.8
	サ ッ カ ー	513	414	12	208	102	12	40	40	1,341	10.2
	バ レ ー	243	623	16	98	94	14	38	37	1,163	8.8
	野 球	260	266	14	189	95	24	46	50	944	7.2
	体 操	179	297	11	60	40	3	12	21	623	4.7
	ソ フ ト	129	206	9	108	41	6	11	22	531	4.0
	陸 上	106	219	2	74	83	21	10	16	531	4.0
	テ ニ ス	69	184	3	87	70	15	20	31	479	3.6
	柔 道	189	140	13	49	21	1	8	13	434	3.3
	剣 道	54	96	4	49	39	12	18	14	286	2.2
	卓 球	56	81		36	39	17	8	4	241	1.8
	バドミントン	19	46	1	2	15	2	3	10	108	0.8
	ハンドボール	23	36	1	6	6	2	2	1	77	0.6
動	ラ グ ビ ー	5	6		4	3				18	0.1
	空 手		1							1	0.007
	そ の 他	18	33	4	12	21	13	5	6	122	0.9
	計	3,786	5,491	177	1,559	1,086	222	409	418	13,148	
比 率 %		28.8	41.8	1.3	11.9	8.3	1.7	3.1	3.2		

〔表4〕 昭和60年度学校管理下におけるスポーツ外傷（日本体育学校センター埼玉県支部）

(c) 部位

肘↓膝↓腰

以上、パーセンテージは非常に高いが高齢者だけに剣道のみ基因するものではないと言える。

4 むすび

剣道は、外傷や障害の少ないスポーツであることは、前掲の表では明らかではあるが、思えば遊びから始まったであろう球技でも、きびしい練習を行えばけがをしたり痛いところの生じるのはやむを得ないことであるが、ましてや人を殺傷する闘技より出発し、道具を着用しているとはいえず、人を打ったり、突いたりする技術の修練であれば、けがをしたり痛いところが生じるのは当然であろうし、むしろそれらが少ないのが不思議な気さえる。

障害の原因が何のスポーツにしろ練習であれば、診療に当たる医師は、原因除去のため「練習の中止」という処方を与えるのが普通である。

しかし、小学生は別として中学、高校になると、総体とかインターハイなどの重要な公式戦があれば容易に練習を休むことはできないだろう。

ここに、監督及び指導者と、治療者即ち医師との意見の違いが生じる。

されば、指導者は、そのスポーツの内容に精通した、また理解のあるドクターを確保しておくのが理想と言えよう。(宣伝ではないが)

バスケットボール界では4〜5年位前からその準備を進めているようである。

最後に、特に小学生の指導者は、小児は大人の小型ではなく、身体的にもまた精神的にも小児特有なものであるということに御注意願いたい。

(前記の表及び数値、またその他多くは次の文献、並びに学会の発表抄録により転用した。)

〈参考及び引用文献〉

- (1) 医師会雑誌No. 〇一、No. 9 子供のスポーツと健康
- (2) スポーツと医学の日常的課題
- (3) スポーツと健康の医学
- (4) 大陸別スポーツ医学コース

(5) 昭和62年整形外科スポーツ医学研究会発表  
埼玉医大、慶大整外教室発表抄録

## 貫心流劍術 佐藤忠右衛門の傳書(二)

劍道連盟相談役 平岡竹雄

一昨年の「徳島の劍道」に佐藤忠右衛門正信の伝書を解説して載せた。本年はその続編として、先祖に当たる同忠右衛門信行の秘伝を微力ながら読んで御指導を賜りたいと思う。

貫心流劍術の源流を尋ねると、元亀年間、安芸国、菊山城主穴戸可箭家俊が創始し、徳島藩内で末期に最も栄えた劍術の流派である。文久前後、阿波藩士分限帳には劍術師家として、四流派、即ち、貫心流、直指流、関口流、心形刀流の中で貫心流師家が徳島城下中心に過半を占めている。また前期の佐藤忠右衛門正信の出身地現在の鴨島町史を調べると、劍士十四名中貫心流十二名と花盛りの観がある。そして、私が前に祖父の師として佐藤正信の伝書を書いたが、同姓である佐藤忠右衛門信行と同忠右衛門俊信の二氏の存在が明らかになった。

ここに好運にも阿波郡市場町の坂本裕二先生は、古文書の蒐集と研究をされて、佐藤忠右衛門信行が高弟に伝授した秘伝書をコピーで二恵贈下さった。私の所持する伝書は、佐藤正信二十八歳の時、明治二年(一八六九)であり、坂本氏の佐藤信行名のそれは、天明四年(一七八〇)で共に高弟に与えているが、両書の間には八十五年の歳月の隔りがある。直系としては祖父と孫の年齢差である。この鴨島町には平尾勝美先生が知恵島におられ、そのご配慮を得て現地の家系、遺跡等を究明するご相談ができています。

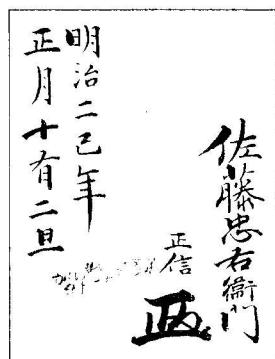
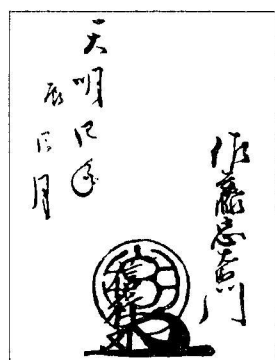
さて、両者の伝書を見ると、一子相伝の面目が顕著に現れている。お家流という書法は徳川家康が愛好し、幕藩体制の三百年近く、公文書は一切この書法に統一された。民間の寺小屋の師匠の教えまでそうであったという。

佐藤家の両伝書は師の年齢や時の隔りや越えて、共通して流麗なお家風の筆致で清冽な流れにも似て淀みがない。

貫心流の極意が簡素明快に説かれ、文武両道に熟達した風貌がうかがわれる。古來劍と禪は関係が深く柳生宗矩が沢庵禪師より禪を学んで劍の奥義に達した話は有名である。佐藤家の伝書にも禪の哲理が生かされている。明治

二年の正信の伝書は目録の初門伝であり、信行のそれは、免許あるいは皆伝に近いもので、それぞれ授ける相手の修行の段階に依っている。次の署名、花押をご覧いただきたい。上は祖父信行、下は孫正信の自筆であり、楷、行書の違いはあるが、共に三十歳前の若年ながら文武両全の家風の伝統が感じられる。

次は、天明年度、二〇八年昔の佐藤信行の秘伝書である。時・所の隔たりを暫し忘れて、阿波が産んだ劍の先輩の名筆と貫心流の極意に親炙していただきたい。コピー疲れもあり判読しにくい点ご容赦ください。



### 貫心流劍術

### 離靜誠位の和談

はなれざれば、中位にあらず。眼ととのひ、つり合はざれば中位にあらず。強氣弱氣も中位にあらず。勝負の要自然と中位に決し、はなれて戦ざる已前に直ちに勝に至ることを知るゆへぬく事あたはず、切る事あたはず。離れて、かたみなきゆへに、ひしぐこともあたはず。妄にをいてよく勇を養ふときは、其誠にいたるべし。誠に到る時は心明必勝也。獨歩也、誠位也、大いなるかな中位の格。初をなし、終をなすものなり。勝に到っては、業事に不意をなす也。不意とは、敵のしらざる所をもしる也。一眼は一身の神通にして、勝負の明闇此處に有り。疑あり、惑あるときは、眼敵に届かず、離れざれば眼離にとどかず。初心のうち見込を強むる迎見張り、或はにらみつめ、或はのぞきつめ、漸く眼性臆下より出て敵を買かんとすれども、専ら眼に心をうつ



生々敵然、夏日の日天久しく見合守る事あたはざるごとし。此處に到ては、所謂無敵也。敵業をなせども、届かざる事を隨に知るゆへ、只行つて勝まで也。然りと云ども、敵其の非業を出す時は、其志を折き、其心を折かざれば、勝てし故に志を折き、心を推事勝負の主要なり。誠気敵然たるゆへ、敵業を出すことあたはず。只行て勝まで也。其勝不意をする也。其業はぬる事あり、只一打にする事あり、打つて、はぬるもあり、つきはねなり。秘すべし。三箇の心法をしるとしらざるに對して口ずさむ。

格と眼、離靜、誠位をしらざれば

くまりしばりてあるにひとしき。

佐藤忠右衛門

信行（花押）

天明四年

辰 四月

山口 作十郎殿

右の佐藤忠右衛門信行の秘法、三箇の心法、格と眼、離靜、誠位は、貫心流の極意である。知ると知らざるに對して口ずさむとは、和歌を以つて示すの意であろう。

格と眼、離靜、誠位を正しく把握して真意を自得しないと、自らの心・技・体の自由を括り、縛っているに等しい。

それでは極意に到達は覚束ない、随つて敵に勝つことは出来ない……。の意であろうか。

師道は、指月の指であると言う。師は弟子にあれが月であると指し示す指の働きをする。月が見えたら指は不要である。

しかし、月を見る（本源の悟り）には指（師）なくしては不可能である、と禪宗の名訓が教えている。

## 原士と劍豪

阿波支部長 坂本裕二

藩制初期の慶安三年（一六五六）徳島藩では「原士」と称する在郷武士団を創設した。原士は未開の原野を開拓して禄とし、有事の際は家老長谷川家の指揮下に入った。

原士の集団は阿波郡香美原（現市場町興崎）の興崎組（写真一）と阿波郡西条原（現板野郡吉野町広永）の広永組が主であった。原士は地元で特別の格式と權威を持ち、郷土や村役人といえども門前を乗馬で通行することは許されなかった、といわれている。

原士はその權威や格式を保つために、日夜文武の修行に励んだ。板野郡吉野町の原士の後裔佐坂繁行氏の所持する享保十二年（一七二七）の記録（写真二）によると、次のような師匠がその子弟に武芸を教授した。

貫心流劍術	市場	佐藤直右衛門	弟子	佐坂弥五郎（市場）
丹石流劍術	市場	平川左驗	武内伝之丞	中山善弥 市場
大島流鎗術	市場	大久保六左衛門	竹内新作	千種卯八
			中山善弥	竹内新作
			平尾加内	中山善弥

これによって享保時代の原士の修行状態の一端が判るが、初期の慶安三年から享保年間までの約七十年間の資料が手もとにないため、その状況は不明であるが恐らくは、当時世上も安定せず、その上与えられた荒蕪の原野の開拓は言語に絶する苦難の連続であったと思われる、多分戦闘中心の武芸に精進したのでなからうか。

時代が下つて八十年後の寛政十二年（一八〇〇）藩内に政変があつて原士の統領は長谷川家から郡代の支配下に置かれるようになった。世の中も太平になれて本藩の武士たちは軟弱になつたが、原士集団は武芸に精進し教養を

高めることを義務づけ、藩もまた原士の武芸を高く評価しその修行を奨励した。このことは阿波郡知恵島村（現鴨島町）の原士の後裔堀北家の記録（写真三）によって窺うことが出来る。すなわち、

覚

私儀嫡子何太郎当年拾五歳 罷り成り申シ付別紙書附指上申候以上

月日 何野何某

一、射術 何流 何野何左衛門弟子

一、馬術 " 右同断

一、劍術 " "

一、鎗術 " "

一、炮 " "

以上

奉願覺

私二男何太郎生得病身ニ罷り在り武役相勤難キニ付キ何野何庵ニ相頼ミ  
医業執行爲仕り度奉存候ニ付キ此段奉願候以上

何野何兵衛 名乗 書判

目付殿当テ

原士の嫡子は十五歳までに、射（弓）、馬、劍、鎗、炮（鉄砲）の術を師匠について勉強する。二・三男といえども病身で武芸を修めることが出来ず、医者になりたい場合は屈を出して許可を受ける必要があることがわかる。また次の記録（写真四）は

天保五年大守様上郡筋へ御通行被遊候御御り宮ノ嶋八幡前において党類

本人嫡子共劍術御透見被仰付 茂利蔵義罷り出テ御目通ニ貫心流ニ而首尾

能り相勤メ其ノ後太守様ヨリ御響紙仰セ付ケラレ候ニ付キ右相勤候者共老

統麻上下ニ而御礼申上候

これは天保五年（一八三四）藩主斉昌侯が美馬、三好郡方面巡視を行った時、宮ノ島八幡宮（麻植郡川島町岩の鼻の北、善入寺島の八幡宮。現在川島城山に移転）の前で原士一統の武芸、堀北茂利蔵の貫心流の劍術形を行ったのを御覧になり、よく出来たので藩主からほめられ、賞状を賜った。後日その授与式に先の演武に参加した原士一統は麻上下を着用して参列、お礼を申

し上げたというものである。

このように日頃修練を重ね、武士道精神に徹した原士は幕末の動乱期に次のように、治安の維持や沿岸防備に出勤して本藩の武士たちを凌ぐ大活躍をした。すなわち、

天保八年（一八三七） 大塩平八郎の乱始末

天保十三年（一八七八） 上郡百姓一揆の鎮庄

弘化四年（一八四七） 日和佐の警固

嘉永六年（一八五三） 黒船来航時江戸湾大森出陣

明治元年（一八六八） 戊辰戦争に出陣

原士のうち個人的に有名な剣豪は次のようである。

寛政年間（一七八九）左坂五郎兵衛は西条で貫心流の道場（写真五）を開き

原士の子弟を明治（写真六）まで代々教えた。また、広永の西条軍八郎は文

政九年（一八二六）に香美村（現市場町）の佐藤壺三郎弟半作（大島）、弟

哲五郎（井後）の三兄弟は、天保十四年（一八四三）に兄より逐次江戸伊庭

道場入門、それぞれ目録を許され帰郷し道場を開いて剣技の外漢学、習字

などを教えたので名声は四方に拡がり各地より門弟が集まった。（佐藤壺三

郎、伊庭道場は前号「徳島の剣道」に記載）

現在でも原士のふるさと阿波から次の若者たちが武道の有名校に席をおいで日夜修業に励んでいる。

鹿屋体育大学 山田真也 河野寿仁

国士館大学 長井 薫 工藤 環

国際武道大学 兼松佳史

日本体育大学 松永貴史

大阪体育大学 楠 正代

また、市場町興崎の武道館では早朝より日夜中学生、豆剣士たち、先輩の後に続こうと努力している。これ等の姿は正に百有余年前の原士達の生活信条が今日まで脈々と息づいていると言っても敢て過言ではなからう。

追記

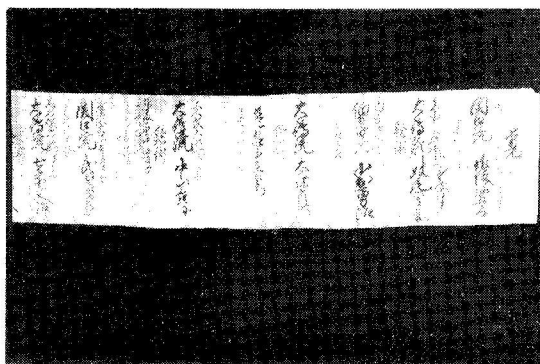
剣道八段範士堀江幸夫氏の先祖堀江二郎兵衛は延宝二年（一六七四）に原士に取り立てられている。

(写真一)

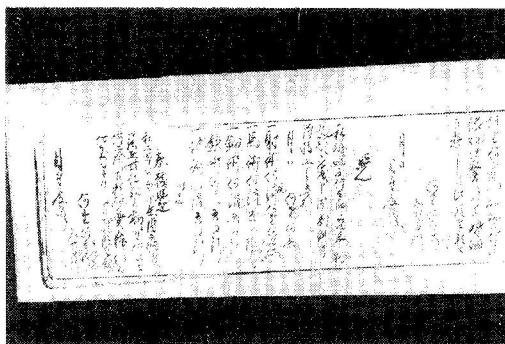
この付近で三十家の原土が生活しておった。興崎組の記念碑



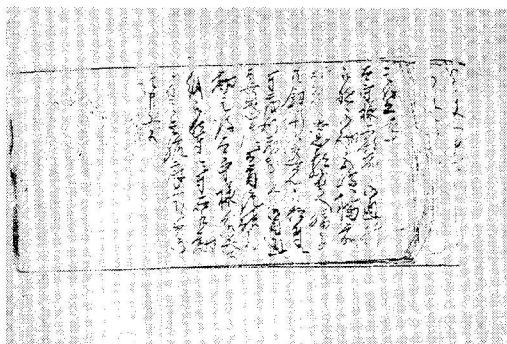
(写真二)  
原土の享保時代の武芸者名面帖  
佐坂家記録

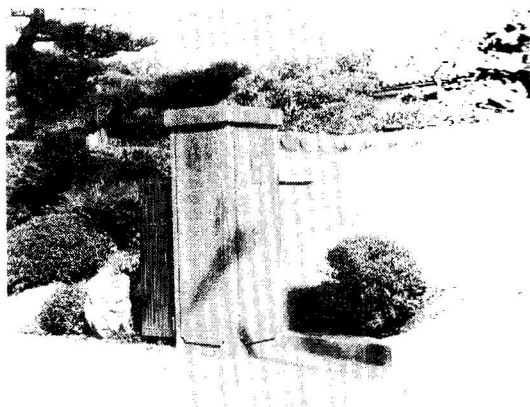
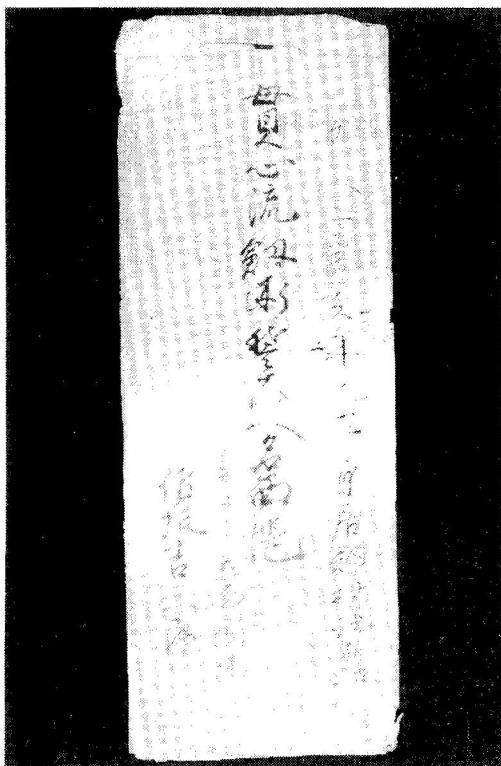


(写真三)  
堀北家記録



(写真四)  
堀北家記録





(写真三)

佐坂三郎兵衛道場跡 三十二番  
行氏宅

門の中堀に沿い4間×4間剣道場、  
4間×3間学門場が明治18年まで  
あった。

(写真六)

(一八六三) 文久三癸亥年九月  
身居郡村仕出和

貫心流劔術稽古人名面帖  
兼学々各面合帖

佐坂吉三郎

## || 剣道随想 ||

### 「剣豪紀行」

土方歳三<sup>ヒジカタタシゾウ</sup>・縁<sup>ユカリ</sup>の地を訪ねて

直心館長 田村直一

◎「五稜郭」を見学したあと、名物の「イカ」を食べた。その食堂にも有名な「土方歳三」の大きな写真が飾られていた。

襟なしのずらずらと小さく並べた一行ボタンのある羅紗地のジャケットの中へ白いマフラーを首にまいて押し込み、座ると椅子までひきずるような、上袷がベルベットで、下袷は幅広に反りかえり、背には馬乗りをつけた一見チェスタフィルド風とも見える濃紺のコートを上から、はおっている。

この写真のような絵を見たのは少年の頃、雑誌「タンカイ」でみた。漆のような髪を長くふり乱している風貌が私の心をひきつけ、土方に心をむけるようになった。

ある作家が歳三は「伊丹十三」に似ていると、書いてあったが。とにかく写真嫌いの歳三が函館戦争最後の三日前に撮ったという。

この函館戦争は、徳川三百年の最後というより源平時代から千年も続いた武士の政治の終止符であった。歳三はそのめまぐるしい時代の変化に身をさらし、その千年の終末に立ち合った佐幕派の武士として個の生きかたをつらぬいた。私が共感するのは多くの「新選組」という集団の者達と違った武士道の哲理をもち山本五十六に通じる戦場での死を選んだことにある。

「たたかれて音のひびきしなづ菜かな」

函館一本松の戦いで壮烈な戦死を遂げた歳三の辞世の句である。

◎官軍の歩哨は「あつ」と驚きの声を発した。つづいて突如「敵襲」と大声で叫んで次の第二声を出そうとしたその前に、土方は馬腹に拍車を加えると、

同時に抜き放った「兼定」の銘刀は真つ向から歩哨の顔を割っていた。

土方が歩哨を斬り倒して、敵中に突入すると同時に銃声があがった。副隊長の相馬主計は、土方の部下五十人と共に太刀を太陽に光らせながらあとにつづいて突撃を敢行したのである。

午前十一時。

歳三は腹部に銃弾をうけ落馬した。相馬と島田の兩名に援けられ、とある小塚に運び入れられたが「クスマン」と一言残して瞑目した。時に三十五歳であった。戦死の街角（若松町）に墓石がある。（写真1参照）

一粉雪つむ歳三の墓にぬかづけば

乙女の捧げし千羽鶴もあり

◎村松友視によると、土方歳三の生きた時代は西暦的には、たしかに世紀末ではなかった。だが世界に吹き荒ぶ大きな風に開まれた徳川時代という観点からすれば、追いつめられた世紀末感覚が、ある「レベル」の者たちには強く感じとられていたとおもわれる。

感受性の鋭い歳三が豪農の六男という立場から浪士隊へ身を投じたのは、まさに海の方から吹いてくる大風を、薩長とは真反対の「リーダー」でとらえたのである。

◎東京中央線の日野駅に降りる。

案内者の上の方敏夫さんも、土方家の一族であり、日野市石田村の出身。真言宗石田寺（歳三の墓）へ向かう途中の家のほとんどが上方姓で



土方歳三 戦死ノ地（函館市若松町）

で叫んで次の第二声を出そうとしたその前に、上方は馬腹に拍車を加えると

あることなど、くわしく証明して、たまたまいた。

石田寺は、このところ歳三関係の見学者が多く、墓前には、函館で撮った土方の写真のコピーをパネルにして、その上へ「誠」と赤い字で記してあるものが供えられ、女子大生等の土方ファンが書き綴った「落書き帳」が数冊もおかれていた。

「年進院殿誠山義豊大居士」

戒名である。

歳三は、天保六年土方義淳の第六子として生まれ、父母とは幼くして死別、兄夫婦の手で養育された。剣は天然理心流を近藤周助に学び、義兄佐藤彦五郎の道場に入りし、そこで、周助の養子、近藤勇と兄弟の義を結んだ。

文久三年、幕府が浪士組の結成を計画するや一門の人達と共にこれに応じて上洛、新選組の副長となるのである。

土方歳三の生家は「石田散葉」という家伝業を副業に製造・販売する。村では「大大尽の家」と呼ばれた。その生家も、付近の村落も昔の面影を残して現存している。(写真2参照)

◎天然理心流は、日野の名主で三千坪の広大な屋敷をもった佐藤彦五郎の道場で教えていた。歳三の器量は高く、近藤勇もこれをみとめ、江戸小石川小日向の試衛館の師範代を歳三がつとめることも多かった。

勇は、一つ違いの弟ということで「歳さん」と気やすく呼んだが、歳三は、師弟の礼を崩さず、常に先生と呼んでいたという。

一説。「近藤は新選組のシンボルで、実質は、土方だといわれる。」

付記。「沖田は試衛館中ただ一人の子飼いの弟子で九歳の時から館主周斎に預けられていた。」

日野市の高幡不動尊の境内に、近藤・上方の「殉節兩雄之碑」が建立されている。

歳三の習った天然理心流の開祖は、遠江出身の近藤内藏助といい、勇の養父が宗家四代目とされ、農山村の武芸熱に燃えたものであった。

◎加藤武雄によると天然理心流は一口に形容して「刀の技」の駆使ともいべき剣法で、木剣は、重くて頑丈な作りで三尺に余るといふ。

映画に出てくるその構えは「地擡りの構え」でよく似合っているが、下段

の構えを得意とする剣法ではなかった。

日野館に案内してもらった。

日野では最も古く格式のある建物で天然理心流の道場が長屋門にあり、流派の宗統であり拠点となっていたところで、庭、門、荘重な玄関、黒光りした柱や床が昔の面影をとどめている。風格のある門の前には「明治天皇」の記念碑も建立されている。

日野館の一角に、「日野やかたそば」の幟旗がたてられ、これもまた評判がよく食客で繁盛していた。(写真3参照)

日野道場にて

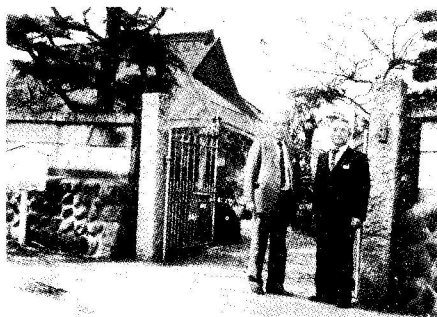
脈打つ多摩の水音に

心ときめく、その歴史

脈々として理心を伝う

甲州街道 カシの木繁る(以下略)

筆者作詩



↑東京都日野市石田(土方歳三生家)

土方歳夫氏

筆者



↑天然理心流道場 日野館入口

## 誰でも参加できる稽古会「知友会」

板野西支部 金 西 重 記

昇級・昇段審査の朝稽古会等で、「知友会」と名の入った垂れネームを目にされる機会があると思います。その「知友会」を紹介したいと思います。火・木・土曜日、午後8時20分より藍住町武道館において行われている一般の稽古会の名称です。

会の発足は6年程前になりますが、現県剣連副会長の高田豊先生に首頭を取っていただき、それまで剣道スポーツ少年団の指導後、指導者の先生方を中心に一般の稽古をしていた、その稽古会を継続発展させていく意味も含めてスポーツ少年団とは独立したものと知友会を結成することになりました。

会の名称の意味は、剣道を通じて広く深く友を知るです。藍住町の町名を入れてないのは、町内外に拘らず誰でも参加出来る稽古会を目指しているからであり、高段者の先生も初心者も大歓迎することになっています。また、剣・竹・道・武等の字句を使っていないのも、剣道をすることは当然として何か理由を見付けては飲み会を持ちたり剣道以外での交友も深めようとしているからです。

現在、教士七段の先生2名、錬士六段の先生5名を中心に、常時10～15名が集まり稽古しています。学校卒業後しばらく剣道を休んでいて再開した人、子供の稽古についてきていて剣道に魅せられ始めた人が多い稽古会ですが、剣道に対する情熱は誰にも負けない人ばかりです。

剣道も強くなるがそれ以上にお酒が強くなる知友会、ぜひ一度訪れてみてください。来たからといって必ずしも会員になる必要はありません。稽古に参加されるだけでも大歓迎です。

最後にもう一度、稽古日と稽古時間を御案内しておきます。

※稽古日 毎週 火・木・土曜日

※稽古時間 P M 8時20分～9時40分

※稽古場所 藍住町 武道館

## 一生懸命私の剣道

小松島支部 田 村 直 一

旧武道館での朝稽古のあと、堀江会長から、何度も何度も御注意をいただいたことは、基礎的な錬成を十分にしないと硬い剣道になる。硬い剣道の人には決まったように相手の竹刀を押さえたがる。相手の竹刀を押さえて打ちこむと上体がゆれたり、体に力が入って気剣体一致の技が出ない、と。……そのことの会得についてずいぶん分りかえし教わったが、硬さは私の全体の中に頭在してなかなか脱けず、いまま残っている。

故人、下村先生には十年間余り、徳農高校でずいぶんお世話になった。私のようにか今日あるのは、先生の多大な、親身な御指導のお蔭で、六、七段昇格への実科合格にむけて、基礎的錬修の特訓をうけたことは、終生忘れることはできない。

竹刀の握り不良、左足の踵の上がりすぎ、右肩が上がっている、面打ちに左足が右足についてゆかない、等々であった。

手の内の悪い硬い剣道は、六段審査にあたり三木前会長から無駄打ちをつつしむよう注意をうけていたところであるが、第一回目は、気が立って、自分でもわからないほど打った。第二回目は、胸ばかり打ったことがあとでわかった。「硬い」「打ち過ぎ」「間合不良」等々が重なった。

六段受審者の為の講習会に参加して、大阪の西範士先生(当時教士八段)から「本物の剣道とは、遠い間合に始まって、瞬時の気のゆるみもなく一足一刀の間合になり、我慢の末に相手の出頭を打つ」ということでなければ……と教わり、第三回目、岐阜県における六段審査にむけて、面一本に全力をあげて日夜練習に励んだ。

ねむれなかつた夜が明け、審査場に向かう。

試合は……辛抱をした。

凜々たる気があつたようにおもう。

足さばきもよくできたようで、当時は三人の相手と対戦したが、それぞれ納得の面が一本打てた。それまでとは、違う何かをつかむことができた。

六段になって、気位ということ、初太刀を許さぬ稽古をするよう先輩諸先生方から御教示をいただき、一方、わが身のうごきの至らなさを省み是正して七段への志を燃えさせた。

硬い剣道は時機がきて、七段受験に再びひっかかった。

鍛練は打突の練習であるが、剣道即打突でもない。どれが正しい機会かの「理機一致」の身心の錬磨ができていなかった。相手を攻めくずしての打突ができず、打つべき機会をのがして三回目も敗退した。

無駄打ちをしない稽古に切り換えること(堀江先生談)にあるとおもいますが、私には辛抱のいることで、逆に全くわが剣が当たらなくなってしまい、どうにもならないのである。

剣の深さがそこに在り、未熟者の艱きがそこに滞留していて、進歩のないわが剣のさばきを今更ながら省みて、かなしい自戒の涙にくれたのである。

東京、日本武道館でいよいよ第四回目、七段の審査である。

肩の力はとれていないか、手のうちは、足幅はどうかなど、すべてにおもいをめぐらせた。

審査員先生とて神様ではない。

七人の審査員の評価、眼には差は無い。

七人の審査員に納得のゆく、いかなれば、眼を見はらせるような実科を行うことが求められるわけであるが。

一〇%から、二%の合格率である。年齢の老若に関



平成三年六月七日東京三菱道場にて「寂然不動」は、岩崎小弥太筆

係がない。判断に迷う内容もあるように承ったが、とにかく、高橋した気位と気位の保持ができたようにおもった。

中川虎雄先生が校長さんになったときよりも、七段に合格したときが、真の喜びがあった、と、いつか話してくれた。

おもうに七段に合格したときは、心の落ちつきというか、ずい分稽古をしたという何か精神的な支えがあり、自然に相手を観ることができたようにおもった。……「あれから幾歳月」。

昨年六月七日、高齢者全国剣道大会に出場のみぎり、西野・勝浦先生方に伴われて東京の三菱道場の朝稽古にも出た。

「寂然不動」。岩崎小弥太氏の筆になる立派な扁額(写真参照)を仰ぎみて常在剣道の義を教えていただいた。野間道場(八、九日の両日)では館長望月範士先生から直じきの稽古をつけていただいた。八十一歳ともおもえぬ体さばき、無駄の無い打突。やわらかいようにみえるが、ピシッと冴えた剣技に頭が下がった。

「一生懸命」、これが私の剣道七段への哲学であり、これからも、何事にも、死ぬまで、一生懸命の人生を歩んでゆくつもりである。

### 雑 感

事務局長 藤 本 辰 夫

最近、少年剣道人口が減少しつつあることは、私達にとって淋しいかぎりです。

その原因を私なりに考えてみますと、世をあげて楽しさやふとりを求め、何ごとにつけても華やかさが好まれる現代において、剣道はあまりに地味であり、謙虚に厳しく道を求めるその本質が現代人に受け入れ難いのでなからうかと思えます。

しかし、このような現代にこそ目先の利にとらわれず、自分本来の生き方を追求するための修行の場としての剣道が必要であると思うのです。

徳島県内も、いよいよ国体一色に染まりつつあります。努力を惜しむこと

なくこの国体を成功させることはもちろん大切ですが、今こそ剣道の良さを一般の人々に理解してもらおう、絶好の機会だと思えますので、宣伝啓蒙に励み、少年剣道人口を増やし、社会教育を充実させていこうではありませんか。

## 小松島市立武道館・武道の殿堂完成

小松島支部長 田村直

「平成四年四月五日落成式」

「ポンポコ狸の剣士もまねく小田浦橋」

小松島市赤石町の阿波赤石駅の南。ふるさとの川・立江川にかかる小田浦橋の欄干には、剣道の防具をつけた少年たぬきの剣士が、ユーモアたっぷりの姿で東と西に立っています。

「早く練習がしたいなあ——」といったげな顔で新しい武道館を眺めています。

この市立武道館は、平成四年八月九日、十日に開催される東四国国体リハーサル大会と、来年十月に開催される国体剣道会場に備えて建設されたもので、団体へのムードアップと共に、ひろく、市（県）民の皆様の武道場として利用されることを願っています。

武道館は鉄筋コンクリート造、一部二階建、総面積二二五〇平方メートル。剣道・柔道共用の正式三面の競技場、更衣室、シャワー、トイレ、器具庫、事務室、身障者観覧室、二階観覧席（二四〇名収容）などの設備のほか、有志の寄贈による、立派な道場大鼓を始め近代器具などが整備されています。

武道館の落成式は四月五日に行われる予定で、三木県知事を始め、国体局長、徳島県剣道連盟会長堀江幸夫氏等多数御来賓の御出席を仰ぎ、式典後剣道形（田村直一、沢井勝之）につづいて小松島高校剣道部強化選手と、市内小・中学校剣道クラブ員による基本錬成や競技会が記念事業として行われます。

本市が団体の剣道会場となるこの機会を生かして、私共も氣勢を上げ競技

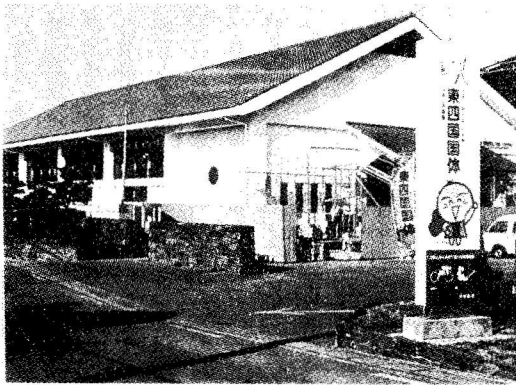
力を一層高める機会としたいものと考えています。

小松島市立体育館と並んだ、武道の殿堂。これから、付近のグラウンドも計画的に整備充実されてゆくの、市民総スポーツのためのいろんな施設が進められてゆくことになり、これからいよいよ健康と体力の向上並びに市

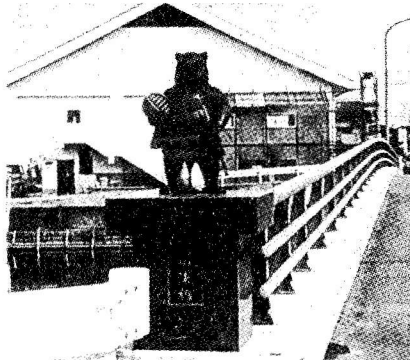
（県）民の交流の場となってゆくことでしょう。水ぬるむ立江川の堤も桜の名所にやがてなるでしょう。皆様、ようこそ小松島へ。（三月五日記）

←平成4年4月5日完成の小松島市立武道館。

（完成ラ急グ）東四国国体剣道会場



→ポンポコ狸剣士姿の小田浦橋



## 人物紹介（各支部より）

### 〈海部支部〉

西山 勝喜（六十八歳 剣道教士七段 農林業）

海部支部長 中山 啓 男

氏は大正十三年十月一日、木頭村南宇西岡信太氏の三男に生まれる。小学卒業時、中学への進学は許されず、家業を手伝う。夜は、木頭錬心館の創始者大沢善二郎先生の道場に通い、徹底した人間教育を受ける。（氏は大沢門下生の高弟の一人）

昭和十六年四月、弱冠十五歳にして産業戦上の名のもとに徴用を受け、呉海軍工廠の弾丸作りに参画し一年六カ月間御奉公。翌十七年十二月、時あたかも大東亜戦真つ只中、二十歳の徴兵検査を待たずして陸軍に志願し、職業軍人の第一歩を踏み出す。徳島連隊に入隊と同時に中支戦線に渡る。過酷きわまる現地教育を経て、幾多の戦闘に参加して生死の境をさまよい、そして敗戦となる。二十一年五月、二歳年長の同年兵に先んじて任官した軍曹の階級も職業軍人の夢も破れ失意の復員となる。復員船の中から見た祖国の山々、「国敗れて山河あり」の思いを実感したそうである。復員後再び家業を手伝う。

昭和二十三年一月、海部町の資産家西山家に乞われて婿養子となる。時を経ずして義父経営の事業が失敗し、先祖伝来の山林、田畑のすべてを失い倒産の洗礼を受く。氏はこの悲運を自分への試練と受け止め、お家再興に向けて全力投球、悪戦苦闘の数十年を刻む。この間、七人の子宝に恵まれ、子どもも成長と共に親子の固い結束が実を結び、今日の繁栄を手にしたのである。氏はこの逆境の中にあつて剣道への思いは捨て難く、日々修行を重ね、七段

位を取得したことは特筆に値する。

氏の父君、西岡信太氏は木頭剣道育ての親であり、生涯を通じて深く剣道を愛し、戦後の人心の乱れを嘆き、剣道による若者の精神教育を力説した人物であった。また、五人の息子には、迷わず剣道を学べと強制したと聞く。本県剣道界の西岡三兄弟は余りにも有名であり、我々剣道家の羨望の的でもある。長兄に西山勝喜七段、続いて西岡金若六段、末弟に福井軍二七段、この三兄弟である。

氏はまた古くから、海部剣道の活性化を叫び、自ら先頭に立って剣道教室の開設に奔走する。現在海部・海南両町に四剣道教室が生まれ、森本好美氏を筆頭に、力量ある指導陣を擁し、日々着実に実績を上げていく。氏は六十年七月海部川の清流を望む自然美に包まれた自邸の一角に、氏念願の西山錬心館を開設し郡内剣道家や豆剣士修行の道場として盛況を極めていく。「剣こそ我が命」を生活信条とする氏の生きざまの証でもある。道場を訪ねると、内助の誉れ高き奥様の愛犬二匹、愛猫五匹の歓迎を受ける風情は格別のものであり、三百余坪に及ぶ広大な西山邸ならではの感を強くするものである。

京都大会連続十五回出場を誇る氏の剣道歴が示すように、剣連役員の大要職も長く、海部支部長も含めて氏の功績は誠に大きい。今後とも末永く本郡剣道界の重鎮として御指導いただくようお願いすると共に、西山錬心館の更なるご発展を祈念して拙文を閉じることとする。

### 〈徳島支部〉

磯部 洋一（四十歳 六段 公務員）

徳島支部長 馬場 力

私は中学生の時に剣道を始めました。現在、県剣連顧問をされている、中川虎雄先生が城西中学校の教頭として在職しておられ、手ほどきを受けて以来、一時期中断したこともありましたが、二十余年剣道を続けてまいりま

した。

近頃、剣道について考えることがあります。それは、一週間に何回か稽古し、そのために何時間かをさいている。往復時間を含めると十時間を越えているでしょう。それだけの時間を剣道に使っているのだから、剣道で学んだことを、他のことにも応用できないものかと思っておりました。剣道の教えの中に沢山の言葉があるわけですが、稽古の中でもよく言われる「残心」などは、仕事の場、もしくは勉学の場において、そのまま当てはまる言葉ではないでしょうか。例えば職場で一つの仕事が完成した時、やれやれと言っ

てそのまま終わるか、もしくは、もう一度、間違いがないか確認してみる。また学生の試験の場では、解答が出来たからとすぐ提出するのではなく、もう一度見直してみる。いずれが良い結果となるか申すまでもないでしょう。

また、剣道では「間」を非常に大切にしているわけですが、これは相手と自分との物理的な距離を指していると思いますが、これを心理的な距離に置き換えますと、あらゆる対人関係に当てはまるように感じます。例えば「師と弟子」、「上司と部下」、「先輩と後輩」、「同僚間」等、全ての人間関係において、最も適切な距離、言い換えれば、「間」を維持できる人が、最も良好な対人関係を築いていけるのではないのでしょうか。

その他にも、剣道の中に沢山の教えがありますが、その一つ一つに蘊蓄があり、思いを巡らすと、全ての教えが日常生活又は職業生活の場に当てはまり、生かすことができるように思えてきます。剣道を学ぶことによって、より良い社会生活、職業生活を送ることができるなら、これ以上の喜びはありません。

## 〈阿波支部〉

一村 昌和 (四十歳) 剣道五段 教員)

阿波支部 坂本裕二

阿波支部の新進気鋭の剣士であり、現在高校に勤務すると共に高校の剣道発展に大活躍を続けている。また郷土の子弟の剣道育成のため多忙な勤務の時間をさいて指導に当たっている。

彼は中学校で剣道の基礎を学び徳島農業高校に進学するや故下村富夫先生の御指導の下に徳農剣道部の一員として良く修練に励み、師の指導よろしきと彼の精進努力が実を結び高校剣道の実力者に成長する。高校卒業後は北海道の酪農大学に進学し専門技術の研究と同時に特技の剣道の修練も怠らず、更にその技を磨き各種の大会に活躍する。学成り郷土に帰るや優秀な成績をもって高校教師に任用され、学校教育に精魂を傾けると共に高校剣道の充実発展に努力を重ねている。

彼の剣に対する旺盛なる研究意欲は居合道にも拡がり阿波居合同好会を結成し、同好の士と共に野口師範の指導の下に多忙な時間をさいて修練に励み有段者となる。更に彼は居合道の奥義を究めんと古武道の研究とその技を習得するため、遠く香川県の岩田範士に入門し先人の編み出した必殺の技の習得に精魂を傾注し日夜精進努力を重ねている。彼の武道に対する研究意欲はとどまる所を知らない現状であり将来の大器と目されている。

彼こそは古来より伝統を誇る阿波郡武道の継承者の一人として大きく成長して行く事を誰もが期待している所である。

## 〈名西支部〉

遠藤 清一 (九十歳 教士五段)



名西支部長 阿部 全司

地域の長老として多くの人々から敬愛されている先生は、明治三十五年三月五日生まれ。大正七年、十七歳の折、国鉄へ就職。業務の傍ら剣道部員として武道の修行に入り、当時の実力者高島範士、須見範士、石井範士に師事し、ひたすら熱心に努力修行を積み著しい

上達を見せました。

その後満州へ派遣され終戦を迎えるまで、望まれて憲兵隊に出向き剣道の指導をし、みごとな成果を上げられました。

戦後収容所生活を一年間、昭和二十一年九月に帰国、同二十二年国鉄へ復職し機関区で勤務し同三十一年国鉄勇退、剣道一筋に後進指導に当たり、県剣道連盟名西支部長も務め石井少年剣道教室にあっては先生の仁徳を慕って多くの若者が、この門に集い、心身共にたくましい人間に育ち、県下剣道界の振興発展に貢献した。この実績は当地の人々の先生にたいする信頼と信望の深さが如実に物語っていると思えます。

## 〈丹生谷支部〉

橋本 一幸 (三十九歳 二段)

丹生谷支部 湯城 豊勝

剣道の盛んな相生中学校、阿南工業高等学校時代は県下大会で数回優勝の経験がある。高校時代は清原栄、尾崎行男、遠藤 美各先生より本格的な指

導を受けた。

選手時代より、むしろ指導者になって、眼光を注ぎてきた感(この指)は、高校卒業後は家業(橋本土建社長)が忙しいためしばらく剣道から離れていたが、昭和五十五年より三年間相生中学校の監督を務めた。平成元年八月より延野少年剣道教室の監督をしているが、この頃より同教室が強くなりだした。県レベルでの主な成績は眉山ライオンズ大会低学年の部優勝(平成二年)、阿士大会、清原杯優勝(平成三年)、小中学生県下剣道大会(平成四年)では代表戦の結果惜しくも準優勝になったが、この時テレビに映し出された顔はまだ記憶に新しい。このような指導が認められ、平成四年三月に東京で行われた全国スポーツ少年団交流大会の徳島県監督に選出された。

延野は剣道の盛んな丹生谷の中心地であり、指導者のメンバーも多士済済である。儀宝邦博、樫本重忠、瀬口豊治、中村義隆、樫本豊成、前田育宏、元浦鈴子の各先生方は父兄でもあり指導者でもある。

練習は毎週火、木、上の夜に行っているが、橋本監督はじめ全員が防具を着けて子どもと汗を流している。県下広しといえども、これだけ多くの指導者が防具を着けて練習している剣道教室は少ないと思われる。また同氏は左党でもあり、今夜も他の指導者と剣道について議論しながら杯をかたむけているだろう。

# 新人紹介

## 〈徳島支部〉

中西 一夫（三十五歳 三段）

徳島支部長 馬場 力

昭和五十一年城南高等学校卒業後、大阪関西医科大学へ進学、学校のクラブ活動として初めて剣道部に入部。大学剣道部では、範十八段梅原貫靖先生（京都）に基本をみっちりとは指導を受ける。打突の技ばかりでなく剣道精神をこの良師から指導を受けたことは、彼の素直な剣法を見ればよく分かります。

その後、持って生まれた素質もあり、練習成果が実って、昭和五十八年十月十日初段、さらに翌年の十一月二十三日には二段と、いずれも一回で大阪剣道昇段審査場で見事合格。この間各種剣道大会に出場し輝かしい戦績を残し、昭和五十七年春同大学を卒業する。

卒業後は大阪旭区で剣友会に入り良き先生、先輩方に指導を受け、剣道一筋に情熱を燃やし稽古を重ねていたが、本来の医療活動が多忙を極めて、彼にとって三度の飯より好きな剣道を中断せざるを得なくなる時期があり、それは人の人生において誰にでもある一つの過渡期であったと思います。その間の肉体的、精神的な苦勞は筆や言葉で表現できないものがあつたと想像されます。だがこの正念場に見事打ち勝つたのは、我々剣道人が誇る剣道精神また修練あつてのことと私は確信しています。

その努力が実り平成元年春には郷上に錦を飾って帰郷、中西病院の後継者として勤める。やがて彼も落ち着きが出来て再び以上の剣道への情熱を燃やし錬心館に入門する。以来大沢館長や各先生、先輩方の指導を受け、平成元年五月二十八日鳴門武道館で三段を受審する。彼は身長一七〇センチ余り、体重七〇キロという恵まれた体型であり、凛とした姿勢から打つ豪剣が

審査の先生方の目に止まったのか、めでたく三段を頂く。

その後の彼は段位に恥じぬ実力と更に上位の目標に向かって、一週間火土の稽古日にもほとんど休まず精進している。一般の稽古だけでなく、その上に午後七時からの少年の稽古に、業務が多忙にもかかわらず極力参加していただき、少年の健全なる心身の育成、非行防止に、若き指導者として活躍しております。彼が道場にいれば素晴らしい汗の匂い、闘魂が醸し出す道場の雰囲気は筆舌ではあらわせない和らぎがある。彼の持つ人間性、謙虚な気持ちはなんとなく漂って、先輩や剣友からも大変愛されている、新鮮な好青年です。

彼曰く『剣道は一度に長時間練習するのが良いと思っていたが、今は先生方のお話を聞き息を詰めて必死に稽古し、しかも息の上がる時間を少しでも延ばすように心掛けています。剣道は奥が深く一朝一夕にいきませんが、より充実した「気剣体一致」を目標にしていきたいと思っています。今は四段を目指して一生懸命練習に励んでいます。』

## 〈名西支部〉

久保 勝義（四十七歳 初段）

名西支部長 阿部 全 司

四十七歳といえは人生登り坂もしょうしう峠に近くやがて降り坂に向かう年、随分思案したらしいのですが、私も年寄せてから始めましたという徳島石武館道場の知人のアドバイスによってか、娘の稽古に付き添って道場へ送迎していた彼が竹刀を手にしてからは、小・中学生の少年剣上等と共に全く年を忘れての基本からの熱心な稽古ぶり、これこそ少年達のお手本だなあと思わせる努力、私は若い時から内向性で内気で積極性がなくてとこぼしていたのですが、入門したのが昨年の二月末一年足らずで初段に合格し、今では少年豆剣上の本立ちに立ってにこやかに稽古に励まれています。努力する人は美しいとよく言われますが、本当にこれこそ背中で指導する立派な先生であると感嘆している次第です。県立鳴島職業訓練校で勤務されています。

り、体重七〇キロという恵まれた体型であり、凜とした姿勢から打つ豪剣が

であると感嘆している次第です。県立嶋島職業訓練校で勤務されています。

## 〈板野東支部〉

松茂小六年 細澤 宏 輔

ぼくは、一年生の時に、松茂少年剣道教室に入りました。二つ上の兄が先に入っていたので、ぼくも剣道を始めました。

始めたころは、「剣道って楽しいな。」と思いました。それに、けいこの後や合宿の時に高学年の人に遊んでもらったことも楽しかったです。だけど、けいこを続けていくうちに毎週火・水・金のけいこ日が、いやになってきました。学年が上になるにつれて、覚えなければいけないことが増えてきて、剣道もむづかしくなってきました。だからだらしていて先生におこられたり、どんどんむづかしくなってくる剣道がだんだんいやになってきてやめたいと思うようになりました。そんな時、剣道の大会で一度勝つてからは、剣道がまた楽しくなってきました。でも、試合の時は緊張して思うような試合ができなくて負けたときはとてもくやしいです。

大きな大会に行くと、とても強い子がたくさんいます。ぼくは、弱いです。みんなすごいなあと思います。ぼくも、一生懸命けいこしていつか大会で優勝したいです。

また、ぼくは小さい時、身体が弱かったけど剣道を始めてからは、だんだんかぜをひかなくなり、じょうぶになりました。

これからも先生のおっしゃることをよく聞いて悪い所を直していきたいと思っています。ぼくは、今六年生だけど中学校へ行っても剣道を続けていきたいと思っています。

松茂小六年 豊 永 剛

ぼくは、四年生のときに松茂少年剣道教室にはいり剣道を始めました。そのときは、楽しかったです。

一年間、基本のけいこをして五年生になったとき、いっしょに始めた三人のともだちと上級生がけいこをするところへ行きました。そのときは、すこ

そして、自分たち三人は、なんにもわからないうちに終わってしまいました。

今では、松茂の剣道教室で一番強いです。

去年の卒業記念大会の時のことです。紅白戦で、いつもはぼくより強い六年生の三人に勝ってしまいました。そのときは、うれしくてたまりませんでした。

ぼくは、これから中学校へ行っても剣道を続けます。そして、きつとよくなりませす。来年も力をだしてがんばります。

## 〈海部支部〉

### 真の喜びを知る

日和佐高校二年 二段 木村 貴子

私は、今まで剣道を学ぶ中で、考えさせられたことが沢山ありました。その一つに、本当の喜びは苦しみの中から生まれるということを知りました。余り稽古もしないで昇段試験に受かったとしますと、その感激は一時的なものであり、やがて消え去るような気がいたします。

私は、このたび三回目の挑戦で二段に合格させていただきました。落ちることも人生の試験だと簡単に口にするけれど、発表黒板に自分の番号を見出せない時のあの切ない思いは、言葉では説明できません。私の学校には、中学での経験者は多くいますが、指導者がいないために入部者も少なく、現在は同好会という形になり仲間は姿を消しました。何度も剣道をあきらめようと考えましたが、剣道精神に反すると思いつけてきました。

週二回の剣道教室に通い、多くの先生から励まされ、合格の喜びを得ることができました。三回目というだけに、あの時の感動は今もなお消えることはありません。気長く御指導くださった先生方に心から感謝いたします。女だから、といってこの道に限界は無い筈です。また次は三段を目指して頑張りたいと心に誓っています。

# 徳島の剣道

## 各パートからの報告

### 第四十八回国体への強化（成年男子）

強化部長 米 倉 滋

平成3年度成年男子選手候補は、4月1日付をもって50名から28名へと強化選手の絞り込みを行い強化練習に取組みました。

強化状況及び成績は次の通りであります。

1 強化練習は県内外における練習試合、合宿、講習会及び県剣連行事への参加等であります。

(1) 県 内

5月17～18日石川県国体チーム。6月20日広島県警。7月1日兵庫県警。

9月7日京都府国体チーム。9月24～25日高知県国体チーム。10月3日三重県警。

(2) 県 外

4月20～21日岡山県。5月25～26日山形県。5月28～29日東京都（警視庁）。

8月27日神奈川県。8月28～29日東京都（警視庁）。

(3) 国体強化講習会

国体アドバイザーコーチ佐藤博信範士八段を、お迎えして6月22～23日警察学校体育館において強化練習を実施した。

(4) 県内合宿

強化練習を兼ね平成3年度国体剣道先鋒の部選考会を8月1～3日警察学校体育館で実施した。

(5) 県剣連主催行事

7月6～7日全剣連主催講習会（鳴門市）。7月25～28日土用稽古。11月

16～17日西善延範士九段以下大阪府剣連の先生方との合同練習。二月、三月、四月4～6日寒稽古。

平成4年3月8日全日本剣道連盟常任理事範士八段小沼宏至先生をお迎えして講習会を実施した。

外毎週土曜日27回警察学校体育館及び中央武道館で強化を実施した。

2 国体強化選手

(1) 一部 大将 坂下彦之、松村克隆。副将 柏原 浩、美馬勝行、北條憲治。中堅 米倉 滋、近藤 亘。次鋒 四宮昌明、吉田博文、平野誠司、佐賀博史、白木 崇、吉田茂生。

(2) 二部 大将 那倉文夫、藤本辰夫。中堅 鈴木伸一、久保隆司、白木洋一、富浦広志、青木博志、佐々木和人、田村義弘、平尾満紀。先鋒 岩木一功、玉田晋作、西山伸二、小坂 治、南谷雅彦。

3 平成3年度上位入賞試合と今後のとりくみ

日	月	時	大会名	本年成績	昨年成績	備考
11	8		全日本都道府県対抗剣道優勝大会	決勝トーナメント	予選リーグ	4年ぶり、決勝トーナメント進出
9	12		全国警察剣道大会	優勝	3位	
8	8		全国教職員剣道大会	個人優勝		福多選手が、男子高大教員の部で初優勝
6	9		西日本勤労者剣道大会	3位	ベスト16	参加二七四チーム中、県警チームが3位
5	19		四国四県剣道大会	準優勝	4位	
	3		全日本都道府県対抗剣道優勝大会	決勝トーナメント	予選リーグ	4年ぶり、決勝トーナメント進出
	3		全国警察剣道大会	3位		10年ぶり、二度目の3位入賞

右記の試合においては、前年度と比較して好結果を上げることができました。強化練習、遠征等の成果が徐々に現れてきているものの国体では一回戦敗退、国体二部四国ブロック予選では4位と低迷し、幾つかの問題点も残りました。

（練習に力を入れて練習し、また、）

## 女子部

徳島市立高校教諭 手塚 十三子

来年度の48国体開催を目前にして、今年も県内外で数々の素晴らしい大会・成績が生まれました。なかでも石川国体における少年女子部の入賞という活躍は、国体開催の大きな自信につながりました。日々の精進の賜物（たまもの）というほかはありません。

また八月に行われた全国家庭婦人大会も、回を重ねるにつれ内容も充実し、「家庭の主婦の交歓会」といったイメージが消え、「上品な中に、力強さのこもった大会」へと年々グレード・アップしています。本年度は、長崎県と強豪大阪府を相手に全員が一丸となって臨みました。本県の大將を務められた中尾青子さん（三段・小松島少剣クラブ）の見事な試合ぶりは、観る人も非常に圧倒するものでした。

中でも特筆すべきは、十一月東京で開催された、第四十回全国青年大会剣道大会において、阿南支部の林美枝選手が個人の部で準優勝、また団体の部（阿南支部 林美枝、喜多さおり、佐々木直美）も三位に入賞しました。

昇段審査を始めとして、女子剣道が改めて見直されている今日ですが、剣道そのものの本質は変わるものではありません。女性の特性を生かしつつ、一人でも多くの方に、機会あることに講習会や稽古会に参加していただくことを切に願います。

刻一刻とカウントされている国体の開催は、女子部の皆さんのきめ細かい御協力を仰がねばなりません。女子部の発展と併せましてよろしくお願致します。

## 大 学

徳島大学剣道部主将 土居 貴之

徳島大学剣道部は、現在約五〇名程で活動しております。

部の活動としては、徳大道場における夕練や藤本館長の御指導による岫雲館での早朝練習を基本とし、長期休暇中には夏は県外で夏合宿を、冬は中央武道館で春合宿を行い、日々練習に励んでおります。対外行事としては、中四国地区における試合や四国インカレ等に参加しております。

我々も年々諸大会において上位進出が果たせるようになり、先輩方の長年の夢である全日本出場に少しずつ近づいております。

厳しい練習の中で技量だけでなく精神的な面の成長も見られるようになり、私生活の上でも規則正しいリズムを一人一人が持ち、日々を送っております。

また、我々だけでなく鳴門教育大学、徳島文理大学、四国大学などの諸大学の協力によって徳島の大学剣道のレベルも高まってきており、秋に行われる「眉山杯」も見ごたえのある大会となりました。これからも中四国で通用するチーム作りを目指し努力していきたいと思っております。

最後になりましたが、諸先生方や先輩方には諸大会において大変御世話になりました。今後とも御指導の程、よろしくお願い致します。

## 高等学校の部

阿南工業高校 坂本 信幸

本年度の高校総体は、新人戦優勝の男子富岡西・女子富岡東中心の戦いと思われたが、戦前の予想を覆し、男子は普通科強豪校を打ち破り十一年ぶり七回目の優勝を飾った阿南工、女子は常勝富岡東を接戦の末下し、念願の初優勝を果たした富岡西という結果となった。

二週間後開催された四国選手権大会（徳島）において男子団体では、苦しい試合運びのなか勝ち上がった阿南工が、徳島県勢として三度目の準優勝

(優待経歴) (一)、女子団体では、大会五連覇を狙った富岡東が惜しくも準優勝となり、富岡西が三位であった。男子個人では、磯部(富岡東)が第一三大会より数えて三十六年ぶりの優勝、山室(城ノ内)が三位に入った。女子個人では、吉岡(富岡西)、小篠千(富岡東)が三位に入った。今回の四国大会は、大会史上初めての好結果が得られた。

さて、前記の好結果で意気揚々と臨んだ全国総体では、男子団体・女子団体とも強豪鹿児島県チームに惜敗し予選リーグ突破はできなかった。個人は女子の小篠千(富岡東)がベスト8と気をはいたに止まった。

今年度は、第一回選抜大会が愛知県において開催される。男女とも新人戦優勝の川島が県代表権も勝ち取った。良い結果を期待したい。

今年度の好結果は、各先生方・関係各位の努力の賜と感謝しております。しかし今後、全国大会で上位入賞を果たすには、益々の稽古と県外遠征をこなし、他県の実力校との交流が不可欠であろうと思われれます。今後ともよろしくお願いいたします。

## 中学校

鷲敷中学校教諭 富田 正

最近、剣道人口は減りつつあると言われている中、中学校の大会参加チームは、年々増えてきているのが現状である。六月の選手権大会では過去最高の男子68校、女子43校が参加し、男子は毎年上位に顔を出している市場中と高浦中の対戦、女子は伝統校同士の阿波中と那賀川中との対戦となり、男子は市場中、女子是那賀川中がそれぞれ優勝した。

八月の県中総体では那賀川中が初の男女アベック優勝を成し遂げ、個人戦においては本年度から男子学年別の枠がなくなり、初代の男子個人戦は泉(鳴門一中)、女子は妹尾(市場中)が制した。

四国中総体では、県勢の活躍が目立ち、男子是那賀川中が準優勝、女子是那賀川中と阿波中の県勢同士の対戦となり、県中総体に続き那賀川中が安定した力で優勝した。また、女子個人戦においても、猪尾(阿波中)が二連覇

を達成した。

佐賀県で開催された全国大会では、男子的那賀川中は惜しくも僅差で三敗退となったが、女子的那賀川中は地元の上峰中を破るなど快進撃を繰り返して勝までコマを進め、本県未到の準優勝という素晴らしい成績であった。また、本年度より開始された個人戦においては、全国の壁は厚く、坪井(那賀川中)が三回戦まで進んだものの、他は上位進出はならなかった。

十二月の新人大会では、男子は木頭中、女子是那賀川中の那賀郡勢がともに優勝した。

昭和六十三年より開始した、中学生の国体強化事業も八月の香川県、広島県への二回の遠征で最後となり、それぞれに多くの収穫を得て無事に終了することができた。

各大会や遠征等において好結果を残せたことは、今後の活動に大きな自信となつて現れると思う。

最後に、日頃熱心に中学生の指導をしていただいている学校現場や地域の先生方に衷心より感謝申し上げ、本年度の中学校からの報告とします。

## 居合道

高橋 憲 司

平成3年度、県剣連主催の行事として講習会を、四月七日に澤田範士を、十一月九日～十日には福田範士をお迎えして、春秋の二回開催しそれぞれ三十四名、五十二名の受講者がありました。また、九月八日～九日の両日勝浦市における全剣連主催の中央講習会には、原田・吉岡両受講生が派遣せられ、九月二十三日にその伝達講習会を実施しましたが、その折の参加者は十二名でありました。大会については、本年度は七月八日に仙台市において第二十六回全日本大会が開催され、本県からも参加をしましたが成績は各段ともに今一歩振るいませんでした。審査会は五月二十六日に三段以下で十五名、十一月十日の五段までの審査で三十名の昇級昇段者がありました。

中央審査会においては、六月二十二日に仙台において吉岡氏が、また十一

した力で優勝した。また、女子個人戦においても、猪尾（阿波中）が二連覇

中央審査会においては、六月二十二日に仙台において古岡氏が、また十一

### 第33回全三三教職員剣道大会（二）

東京都立高等学校 福多 雅 英

会の代表選手の選考をかねて県下大会を開催し、五十一名の参加者がありました。七月八日には香川大会に参加をし、各段（初段〜六段）とも二回戦以上（五・六段は三回戦）に勝ち進み、戦績はある程度満足できる結果でありました。一方、強化練習会を五月十九日に鴨島一中武道場、六月十六日に石井勤労者体育センター、七月二十一日に木頭中武道場、八月二十五日に石井勤労者体育センターにおいて実施し、各々十八名、二十三名、十四名、八名の参加者がありました。

今年度注目したい点は、平尾・張野両先生の御尽力があつて少年剣士の活躍があつたことです。少年の心身の健全育成と会員の裾野の拡がりの点からも今後さらなる発展が期待されます。他方、一般会員にあつて、各地区の先生方の努力によって新規会員の参入があつて前進がみられたものの、一方で脱会、休会する会員があり、また活動している会員が一部に限られている等反省すべき点もあり、来年度に向け全員が少しでも参加できやすい環境造りを模索しながら、各会員の奮起を切望するところです。

平成三年度第33回全国教職員剣道大会が、八月八日神奈川県横浜青木体育館で開催されました。試合は団体戦と個人戦があり、本県代表として団体戦には、大将藤本先生（鳴工）、副将西谷先生（城ノ内）、中堅白木先生（川内中）、次鋒田村先生（勝浦中）、先鋒玉田先生（文理中）の各先生方が、個人戦には、女子の部古川先生（宮浜中）、小学校の部富浦先生（牟岐少年自然の家）、中学校の部榊山先生（生光中）が出場されました。私は高校・高専・大学・教委の部に出場いたしました。本大会へは二年ぶり六度日の出場でしたが、私にとって一生忘れられない大会となりました。

「全国教職員大会で優勝する」、これは教職を志した頃からの夢でした。自分の実力からするとどうも無理な夢でした。しかし、試合に出場するかにはベストを尽くし優勝を目指したいというのが、私の剣道修行上のひとつの目標であり、夢でもありました。平成元年度の本大会で三位に入賞し、自分の夢に少し近づけたような気がして「よし次は」という気持ちになった頃、大きな挫折感を味わうことになりました。詰まらないことで怪我をし入院することになってしまったのです。診断では左膝前十字靭帯損傷・左膝半月板損傷で移植手術が必要とのことでした。手術前担当医の先生に、「手術後剣道はできるでしょうか、以前と同じように試合はできるでしょうか。」と、お聞きしました。

「私にとって、最も知りたいことでした。答えは「手術後一年で剣道はできると思っています。しかし、試合に出て以前と同じように戦うには無理です。」ということでした。

悲しくなりました。もうこれで自分の夢も消えたと思うと大変情けなくなりました。今までもっとと努力したら良かった、必死になって取り組めば良かった、と後悔しました。

手術後、多くの先生方、友人、知人、生徒達から励まし勇気づけていただきました。本当に有難いことだと思えました。そのおかげで「もう一度挑戦

「一、二、三、四、五」という思いが強烈に湧き出てきました。一日も早く復帰して練習をした。もう一度、全国教職員剣道大会に出場したい。

そんな思いの中で、第33回全国教職員剣道大会に出場させていたくださることになりました。結果的には念願の優勝をすることができたのですが、一回戦から延長戦の連続で苦戦ばかり、今思い出しても冷汗の出るような内容で、納得のいく試合はできなかったと反省しています。しかし、本大会に出場し試合できたことに喜びを感じ、剣道ができる幸せを感じました。

未熟な私が優勝できたのも、剣道連盟の先生方をはじめ、学剣連の先生方、友人、生徒達等、大勢の人々の御支援・御指導のおかげだと感謝いたしております。本場に有難うございました。この誌面をお借りしてお礼申し上げます。この結果に甘んじることなく精進して行きたいと思えます。

## 第36回全国高等学校体育大会に参加して

阿南工業高等学校剣道部主将 中山政人



八月、私達の目標であった、インターハイに出場することができました。阿南工業剣道部に入部した時からの夢だったのでとてもうれしかった。

試合は二日目でした。対戦相手は鹿児島実業と市立岐阜商業でした。両試合とも自分の力を十分だすことができず、自分もチームも二敗し予選リーグを突破することができませんでした。次の日は団体、個人の決勝を見ました。どの試合も気迫やスピード、技の多さに驚きました。またただでなくチームワークの良さにも、かなりの差があるように思いました。

この大会に出場できたことは、自分にとって大変大きな自信になりいろいろなことを知りました。そして指導していただいた先生や先輩、応援してくださった皆様方にとっても感謝しています。

また後輩には予選突破という目標を果たしてもらって、私もまた予選突破から剣道が続けて行きたいと思えます。

## 第36回全国高等学校総合体育大会に参加して

徳島県立富岡西高等学校 吉岡路



県総体で念願の初優勝をし、高校生活の大きな目標であった全国高校総体（インターハイ）出場を果たした。しかし私達は、優勝のよるこびも束の間、インターハイという新たな目標に向かって再び闘志を燃やし始めた。「感動は、いっしょうけんめいの熱い風」のスローガンのもと、富士の麓、緑豊かな静岡県御殿場市で盛大に開催されたこの大会は、富岡西高にとって初めての女子団体の外、男女各個人戦も加えた三部門への出場である。

大会初日は、男子個人と女子団体の予選が行われ、まず個人戦へ昨年に続き、中野が出場。初戦、強豪山形県代表の左沢高校の選手と対戦した。しかし結果は惜しくも一本負けに終わり、二回戦進出は成らなかった。続いて行われた女子団体。予選リーグは、まず、三チームで行いその中の一チームだけが決勝トーナメントに進めるわけだが、私達のリーグは、長野県代表長野高校、鹿児島県代表鹿児島高校、そして富岡西高校との間で争われた。特に鹿児島高校は、全国でも名のある強豪校であり、予選突破を目標とする私達の前に大きく立ちはだかっていた。しかし持ち前のチームワークの良さとおねばりの剣道で勝負しようと思いいちチーム一丸となつてこの予選二試合に臨んだ。一試合目、少々硬さを感じながらも長野高校に「3-0」と快勝し、次の試合へとつなぎ、そして鹿児島高校戦。それは引き分け二つを含む緊迫した試合となったが、文字通り粘りのある私達の試合を展開した。しかし結局「1-2」の大將戦で敗れ、当初の目標であった決勝トーナメント進出は果たせ

なかった。

力の差もなく、流れも幾分こちらにあった。しかし、最後の最後に出てしまった勝負に対するあせりが、この試合の敗因だったように思う。悔やんでも悔やみきれない思いと、これでこのチームを組むのも最後だという寂しい思いとが重なり涙があふれた。そしてその後もあと少しだったのにという気持ちがいっまでも心に残って消えなかった。

今、この大会を振り返ってみると、本当に有意義であり私を大きくしてくれた大会であったと思う。なぜなら、どんなに悔しくても、いつかそれがいい経験と思いついになりそれをバネに更に成長できると思うからである。そしてこの大会に参加して、多くのすばらしい剣道を間近で見られ、全国という大きな舞台で実際に自分を試せたことはきっとこれからの人生においても大きな自信となることと思う。

最後に、私達をここまで導いて下さった監督の先生、先輩の方々、そして多くのすばらしい剣友を与えてくれた剣道に心から感謝の言葉を言いたい。本当に有難うございました。

## 全日本女子剣道選手権に出場して

富岡東高校 三年 小 藪 香

私は、高校三年間の締めくくりとして、何としても全日本女子剣道選手権大会に出場したかった。徳島で行われた予選には、気合を入れて試合に臨んだ。一戦一戦、本当に気の抜けない苦しい試合だった。決勝では延長ののち面を決めて、全日本女子剣道選手権の出場権を手にすることができた。

九月二日、大阪で行われる全日本女子剣道大会の会場へと向かった。試合場をつぞくともものすごく緊張して体が震えた。

「さっさと、ここで試合するんだなあ。」

「三試合、早くアップしなければいけないと思った。アップ会場に行くとおどろいて、遠くで我先にとアップを開始していた。私も出遅れてはいけないと三試合、三試合、三試合と受渡り、表のかたといっしょにアップした。アップが終わる

と何となく緊張がほぐれた。

開会式が終わる直ちに試合が始まった。私は遅い試合だったので、他の選手の手試合を観戦していた。みんなすごい気迫で試合をしていた。私も気迫では誰にも負けないようにしようと思いい、再度アップに向かった。

「あと3試合で、お前だ。」

と先生に言われ心臓が飛び出しそうになった。試合場に向かう私は、多くのことを考えていたような気がする。

一試合目に、私は福岡の強豪だと言われている堤さんと竹刀を交えた。私がかかっている気持ちで試合に臨んだ。試合開始後、私は相手が出てきた所を小手でおさえて先手を取った。しかし相手の人もどんどん攻めてきて、私に一瞬のスキもあたえてくれなかった。その時ふっとひき小手を打たれてしまい勝負にもっていかれた。振り出しにもどってしまったと思った私は、あせってしまった攻めに行っていたが相手が出てこないので、ふっと後ろにのけぞった時に、面に飛びこまれてしまい、負けてしまった。しかし、この試合方法はリーグ戦であり、私はあと二人と試合ができるのです。

二試合目は、青森県の人で、一敗している私はこの試合を絶対に勝たなければいけないと思いい試合に臨んだ。何とか苦しい試合を手に入れることができた。

三試合目、私が勝てば予選リーグを出られるという試合だった。相手は同じ高校生。よく対外試合で試合をしていた相手でもあった。それがあだになったのか、いろいろ考えて試合をしていたためか、面に飛びこまれて先手を取られてしまった。またあせりがでてしまい、じっくり試合ができないまま負けてしまった。

結果は、一勝二敗で予選リーグは突破できなかったけれど、逆にもう一度がんばって練習して、もっと上位をねらおうと考え始めた。自分だけの試合でなく、他の人のすばらしい試合を間近で見ることができて非常に感激した。やっぱりする技の量も違うし足さばきもすばらしい。私ももっと練習して、すばらしいと言われる剣道を志したい。

## 第13回全日本高齢者 武道大会等に参加して

徳島県高齢剣友会 事務局長 西野 四郎

### (一) 第十三回全日本高齢者武道大会に参加

年毎に老人パワーを東京日本武道館に求め、永年の修練の成果を競い、また親睦の輪の広がりを唯一の生き甲斐に迎えた、第十三回全日本高齢者武道大会が平成三年六月十日(月)に開催されました。

徳島県は清原栄範士以下十六名が参加し、それぞれに自己最高のコンディションで試合に臨みましたが、残念ながら決勝リーグに駒を進めることが出来なかったが、次の先生方がベスト8に、実力を発揮し、進出する成果を挙げて下さったことがせめてもの慰めでした。

傘寿(八十歳以上)の部 清原先生は四回戦で福島県相楽芳三七段と対戦し、面をとられ敗退。

特組(七十五歳以上)の部 蝦名先生は四回戦で鹿児島県井上清彦七段と対戦し、面で敗る。

B組(六十五歳以上)の部 遠藤先生は昨年に続いてよく健闘され六回戦まで勝ち進みましたが、後一歩及ばず次城県高崎慶男七段に小手で涙を吞む。同じB組で吉田租七段が四回戦まで素晴らしい剣さばきで勝ち抜いて来られましたが、皮肉にも遠藤先生と同志打ちとなり、姿を消すことになったのが誠に残念でした。

東京大会の参加だけに終わらず、折角の機会だから東京で稽古が出来たらと言うことで、勝浦先生のお世話で五年程前から三菱道場と講談社野間道場の朝稽古に参っておりますが、大歓迎を受けて居ります。

特に野間道場は年中無休、望月館長を始め各地から有名な高段の先生方が大勢来られ、稽古が願えるので実に高度な技量に接することが出来、大変勉強になって居りますことを付記します。

### (二) 平成三年度徳島県高齢者剣道交流大会開催

とくしま「あい」ランド推進協議会が、超高齢社会に備え、ぬくもりと活



とくしま「あい」ランド推進協議会主催  
平成三年度徳島県高齢者剣道大会



平成三年六月十日第13回全日本高齢者武道大会



第6回徳島県高齢者剣道大会

方ある長寿社会づくりの一環として、高齢者の健康増進、社会参加、生きがい活動の促進を図る目的で平成三年度徳島県高齢者剣道交流大会が七月十八日(木)九時から徳島中央武道館で県高齢剣友会共催で開催されました。

主催者として「あい」ランド推進協議会篠巻浩一常任理事並びに清原栄高年齢剣友会長の挨拶があり、選手代表前年度C組優勝者勝沼七段の力強い宣誓で試合が開始。

参加団体八チーム 個人四十二名

いずれも二カ月後に迫っている九月二十九日の第六回県下高齢者剣道大会の優勝を目指して、各選手の気迫が場内に満ち溢れ、大変見応えのある大会でした。成績は次の通り。

団体	優勝	準優勝	三位	四位
個人A組	平岡 竹雄	石井克太郎	勝浦 守	西野 四郎
個人B組	遠藤 一美	早川 一也	吉田 租	勝沼 信彦
個人C組	高松 実	中山 啓男	近藤 康次	雄西 義春

(三) 第六回徳島県高齢者剣道交流大会開催

平成三年九月二十九日(日)九時から県立中央武道館にて、第六回県下高齢者剣道交流大会が昨年と同様、本年も遠く東京から藤原三人八段の特別参加があり、松島猛理事長、小田部三郎、鈴木常司、白川新吾、島五月男の各七段の先生方、また高知からは、土佐生涯剣友会の依岡藤喜会長を始め門田豊、公文義樹、岩河邦明、大石恒詮、浦田優、寺田竜三の各先生の剣友をお招きし、ここに華々しく開催することが出来ました。

形通りの式次第も終え、前回C組優勝者高松実六段の力強い宣誓でいよいよ試合開始。なおこの度はお疲れを承知の上で東京・高知の先生方には審判をお願いする。

三後三は東京、高知、徳島の三者交流親善リーグ戦を行い、東京チーム二勝、高知チーム一勝一敗、徳島チーム二敗の成績でした。徳島も二敗は致

しましたが正に伯仲した気迫のこもった好試合が随所にみられました。なお最後に四十分間入り乱れての交流練習を楽しみ快い汗を流し、一日のスケジュールも午後四時に無事滞りなく終わることが出来ました。

午前中の成績は次の通り。

団体	優勝	準優勝	三位	四位
個人A組	西野 四郎	勝浦 守	中川 虎雄	早川 一也
個人B組	高下 正義	浜田 逸郎	遠藤 一美	西山 勝善
個人C組	中山 啓男	雄西 義春	佐藤 勇	近藤 康次

第21回全国中学校

選抜剣道大会に出場して

栗賀中学校(男子) 馬 渕 博 之

8月19日、僕達は、先賀寺で行われた全国大会に出場しました。開会式が終わり試合が始まりました。団体戦は個人戦の後だったのでその間に軽く汗を流す程度に練習をしました。そして試合前にミーティングをし、みんなの気持ちを一つにしました。「勝つぞ」と。

一試合前になりました。さすがに、みんな緊張して黙りこくなっていました。緊張と不安で押しつぶされそうなかで、試合が始まりました。相手は茨城県の勝田第一中でした。結果は、3対1で見事に勝ちました。すると、途端にみんなが元気になり口々に、「次も勝って、決勝トーナメントに出るぞ。」と言いました。次の相手は愛知県の鶴城中でした。結果は、1対0という僅差で負けてしまいました。僕達も、まだまだだなあと思いました。

思えば、新チームになって全国大会出場を目標に厳しい練習を重ねてきました。試合に負けるとすぐ帰って練習をしたこともありました。九州や大阪

「この三具へ、遠征に行ったりもしました。全国大会では予選で敗れ、今までの成果が、十分に發揮できなかったことがとても悔しかった。それだけに、三具までも忘れられないだろうと思います。」

僕達が全国大会という大舞台に立てたのも、斎先生をはじめ、多くの先生や先輩方に御指導いただいたからだと思います。先生、先輩どうもありがとうございました。

全国大会は、あっという間に終わってしまったけれど、僕達の心の中で忘れられない思い出として残るでしょう。これからも、この感激を忘れずがんばっていききたいと思えます。

## 第21回全国中学校 選抜剣道大会に出場して

那賀川中学 女子

大会開催の前日、私達は太宰府天満宮へ「明日の試合では自分のベストが出せませうように。」と祈願しました。

八月十九日、私にとって初めての全国大会での、予選リーグ第一試合目。少しかたくなつたのか、自分達の思ったような試合ができず本数勝ちでした。しかし、二試合目は、自分達のペースをとりもどし、四対〇でベスト16に入ることができました。

決勝トーナメントでは、一戦一戦を大切に精一杯戦い悔いの残らないようにと頑張りました。準決勝では、地元の上峰中学校との対戦でした。三月末の九州遠征では、一対四で負けました。今度こそはと、気合を入れ直し試合に臨んだ結果三対一で勝ち、次の決勝へと波ののって進むことができました。独特な雰囲気の中で鹿児島代表の大川中学校と決勝を迎えました。決勝では、一対二で惜敗しましたが、悔いはありませんでした。それは、一人一人全力を出しきったからです。

私達は、全国大会出場を目標とし、斎先生の御指導のもとチームワークを大切に一年生、二年生、三年生が一丸となり、多くの遠征、練習試合そして

厳しい練習を積み重ねて頑張ってきました。三年間、共に励まし合ひ、また競い合ってきた男子とも一緒に全国大会に出場できました。

三年生最後の試合において、全国大会準優勝。思ってもいなかった好成績を上げることができたのも、斎先生はじめ諸先生、先輩方の御指導、そして良き友でもありライバルでもある高木さん、後輩、私達を応援して下さい。父兄の皆さんがいたからこそとれた賞です。本当にありがとうございます。後輩のみなさん、私達の出来なかつたもう一つ上を目指して頑張ってください。

## 第二十六回全日本居合道大会

監督教士八段 平尾勝美

平成三年度第二十六回全日本居合道大会は、勇将伊達政宗で名高い尚武の地仙台市において開催されました。九十二万の市民を擁するみちのく第一の仙台市は、その名に恥じないゆつたりした町のたたずまいと、落ち着いた風情を以て遠来の私達を迎えてくれました。

会場の仙台市体育館は新しく本場に立派な体育館で、色々な設備と機能を完備した総合体育館として東北地方を代表する仙台市の面目を一新するに足る実に立派な会場でありました。十月十三日全国各県の予選を勝ち抜いた各段代表選手が一堂に会しての開会式は華々しい中にも緊張感に満ちたものがありました。

試合は五段の部、六段の部、七段の部の三部に分かれ各段トーナメントの組合せ表により進められました。本県代表選手は二回戦までしか勝ち進むことが出来ませんでした。何れもその相手は三位入賞の強者ばかりでした。徳島県の代表選手はこの相手に堂々と対戦し2対1の僅差で敗れました。本場に惜敗の一語につきます。後一步の修煉が望まれるところですが、広い視野に立って鍛錬と研鑽を積み今後に備えて頂きたいと願うこと切なるものがあります。

会場の設営並びに運営等は糸乱れぬ規律の下に、実に見事に実施され、四八国体を目前にした徳島県人として、大きな感銘と良いお手本を見せて頂

き大変良い勉強をさせて貰いましたことを宮城県の皆様にも絶大なる謝意を捧げますとともに心から厚くお礼申し上げます。

## 伊原秀文先生を思う

徳島県剣道連盟顧問 石井 克太郎

先生は、大正六年一月一日海部郡日和佐町に生まれ、長じて県立海部中学校に進み、剣道を故浅井真一範士に学ぶ。五か年間の努力によってその技量は大いに上がった。この時の同級生で共に汗を流して競い合った一人に若松修作教士がいた。(京都行きを共にしたが翌年の春大阪に居を転じ京都から去った。)

中学を卒業して京都へ、剣道に対する思いは増すばかりである。武徳会本部の講習生となり、また小川金之助範士の弘道館へ入門し、昼は武徳会、夜は弘道館で稽古に精進した。

修行三年、昭和十二年三月立命館大学専門部に入学、同十五年四月卒業。

翌年一月徴兵による現役兵として蔵本の留守隊に入り、数か月後に中国戦線の郷上部隊(鯨)へ転じて終戦まで苦勞した。踏破した距離数千キロに及んだ。陸軍中尉中隊長職だった。

昭和二十一年博多に上陸して郷里に帰る。

昭和二十七年公立学校教員となるまでの間は、公職に就くことなく(軍隊の関係)鉄工関係の仕事をしていたようである。

教員となって教育界に入った。この時期になっても学校教育は大変だったようだ。しかし先生の明朗で真面目な人柄は、どの学校でも生徒から慕われた。母校の日和高等学校へ赴任するや海部支部の有志と相はかり、地域と学校剣道の発展に努力をした。

連盟の役員としても当初から剣道発展のため力を尽くし、常任理事、審議員(長)として、また徳島県代表選手として四国会、国体、東西対抗、都道な県の冬大会に出場して立派な戦績を残した。

趣天に一絵画がある。写生が好きでよく出歩いたらしい。連盟の機関誌

「徳島の剣道」の表紙に風景を描いている。

晩年には、徳島少年剣道教室で一緒になったが、初心者への指導は、親切に気長く手をとって教えたので子供達もよくなつた。

「この頃どうも腹に力がいらん。」と言いなが稽古は子供、一般と続けていたが「時々腹が痛くなる、あまり食欲が出ない。」とコボし稽古も中途でやめるようになった。

間もなく入院、手術、退院そして家で養生しながら通院していたが再び入院して、闘病生活約一か年、平成三年三月十九日遂に逝去された。誠に痛恨の限りである。

まだまだ健在で、剣道界のために頑張って貰える年齢だったのに。

逝かれて丁度一年、在りし日のことなど思い浮かべ倍旧の懐かしさに涙を禁じ得ない。

### 〈称号・段位〉

昭和三十三年十二月 教 士  
同 三十六年 五月 七 段  
平成 三年 三月 範 士

## 故富永利男先生を偲んで

(七十七歳 剣道三段)

坂野東支部 加藤 源次郎

板野郡北島町太郎八須、富永和田三郎氏の長男として生まれる。

先生は、故伊丹要氏の片腕として北島少年剣道教室創設に日夜尽力され、昭和五十二年四月に設立するや進んで同教室の指導者となり、少年の非行防止と健全育成を指導目標として頑張ってこられた。故伊丹先生が病魔に侵され入院されるや、その代役として生徒、保護者、指導者の三者一体の原則にそって頑張ってこられた。

また伊丹先生より受け継がれた道場訓、礼節、融和、感謝、忍耐、親切を

率先垂範。生徒は勿論保護者、また指導者をも指導せられた。

また社会的にも磨きの掛かった人徳により老人会、軍恩会、傷痍軍人会の会長として多くの人々のお世話をされた。

また自己の健康管理には特に注意され昭和五十年より早朝、雨の日、また寒風肌刺す冬の日も休むことなく毎日約十キロの道をジョギングされ、平成元年十一月全国健康福祉祭「マラソン」大分大会に県代表として出場され敢闘賞の表彰を受けられる等、数々の功績を残されたのであります。

終わりにになりましたが少年剣道の本旨は打突は正しく、そして大きくまた強く、速くを練成し、勝負にこだわらない、剣の理法の修練による人間形成の道であることを常に忘れてはならないと思います。

## 逝きし故藤野又次郎剣士を偲んで

勝浦町横瀬 大久保 喜 正



農業を営むかたわら、剣の道に志し生涯を終えた、故藤野又次郎氏について業績の一端を紹介いたします。

藤野氏は、戦後の社会が混乱の最中、このような時期こそ剣道によって若者の健全な心身を鍛えることが必要と、戦前剣道に尽力された先生方に指導を受け真剣に練習に励んでおられました。年を重ねるに従い剣道大会に出場する機会も増え団体戦では、いつも勝浦の大将として健闘され、県下剣道大会において団体優勝したこともありました。

藤野氏は、中学校剣道部の育成指導ならびに高校生の指導にも活躍され、その間県剣道連盟理事、勝浦支部長を歴任され文字通り生活の中に剣道ありの姿そのものでした。近年に至っては、勝浦少年剣道教室の設立にも努力され、正に藤野氏の熱意が勝浦の剣道を支えたと思われれます。

しかし、天命はどうすることも出来ず、勝浦のひいては徳島の剣道の発展

を願いながら一生を終えられたのです。

最後になりましたが、藤野氏の御冥福を心からお祈り申し上げます。

故藤野氏の奥様が藤野氏を偲んで詠んだ作品、三首を紹介いたします。

○ 汗一杯 消毒竿をとりかえし みかん畑 草刈る妻は 涙一杯

○ 夫が使いし 剪定挟 何か伝えてくれよと 握りしめ

○ 剣道五段の分厚い手も もう今はみえず

# 平成三年度各種講習会参加状況（順不同）

平成三年春季講習会 4月13日～14日 於鳴武

## ○二日間参加者

▽徳島支部 堀江幸夫、大澤孝彰、柏原浩、森川澄、西岡金若、南充美、岡崎明、磯部洋一、二宮治海、手塚十三子  
▽鳴門支部 山田富康、伊賀上仙市、佐藤勇  
▽板野東支部 高松夫  
▽板野西支部 元木武、福永徳、岡島茂雄、兵頭新平  
▽麻植支部 植田一夫  
▽名西支部 久保隆司  
▽阿南支部 清原栄、遠藤一美、上井司  
▽海部支部 影山美雄  
▽警察支部 坂下彦之、松村克隆

## ○一日参加者

▽徳島支部 西野四郎、馬場力、藤本辰夫、福島栄治、東徳美、糸田川美千男、谷木利勝、近藤康次  
▽鳴門支部 寺西慶裕、前林利雄、浅野精一  
▽板野東支部 三木只雄、大野義則  
▽板野西支部 高田豊、高田亮、糸谷文雄  
▽阿波支部 村喜佐男、中尾誠  
▽三好支部 平田照男  
▽麻植支部 平尾勝美、山崎国忠  
▽名西支部 高下正義、美馬政雄、広瀬清、阿部全司、高下博行、松田みつ子  
▽勝浦支部 立川信彦  
▽小松島支部 堀金實、高木寿史、能沢信行、有松京子、中尾青子  
▽阿南支部 長久保武彦、中山繁輝、阿部三十三、池田英夫  
▽海部支部 富浦廣志  
▽丹生谷支部 吉田租

▽警察支部 近藤亘、吉田博文、一形裕司支部 鈴木伸一

## ○四日間参加者

平成三年土用稽古会 7月25日～28日 於中武  
▽徳島支部 堀江幸夫、石井克太郎、西野四郎、柏原浩、西岡金若、手塚十三子、手塚英治  
▽鳴門支部 竹内佳代子  
▽海部支部 中山啓男、影山美雄  
▽警察支部 松村克隆、南谷雅彦

## ○三日間参加者

▽徳島支部 東内勉、馬場力、森川澄、松村明文、河野公雄  
▽鳴門支部 伊賀上仙市、佐藤勇、前林利雄  
▽小松島支部 田村義弘  
▽警察支部 坂下彦之、岩木一功、小坂治  
▽東京 宮本孝雄

## ○二日間参加者

▽徳島支部 勝浦守、勝沼信彦  
▽鳴門支部 山田富康、藤本雅史  
▽名西支部 白木洋一、高橋博行  
▽小松島支部 西山伸二、中尾青子  
▽阿南支部 中山繁輝  
▽海部支部 吉田租  
▽警察支部 美馬勝行  
▽大学支部 石本真希  
▽勝浦支部 吉田租

## ○一日参加者

▽徳島支部 藤本英夫、藤本辰夫、東徳美、磯部文美、松林栄、林理之、嶋村謙  
▽板野西支部 河野美恵子  
▽美馬東支部 木村みどり  
▽小松島支部 田村直一、松田敏弘、有松京子  
▽阿南支部 山田浩司  
▽海部支部 平岡玲雄、富浦廣志  
▽丹生谷支部 白木崇  
▽大学支部 鳴川善人、小川大造、折上恭子

平成三年居合道秋季講習会 11月9日～10日 於中武

## ○二日間参加者

平尾勝美、張野久晴、原田勝、小野寺恒義、前田健志、野口直之、吉岡修一、青木茂生、岡田良人、鈴江正雄、福井勝、松村宏道、川西英爾、西山光次、高野康寛、早川幸男、斉藤吉明、吉田正雄、満寿良史、山本正司、林理之、平瀬進也、四宮博、桑原栄治、猪籠生祥、関口公司、小引健、中川芳文、飯田正夫、他少年六名

## ○一日参加者

高橋憲司、岡田育幸、坂本憲一、宮和雄、荒木隆夫、新見和彦、西本忠司、藤本文義、他少年八名

平成三年秋季講習会 11月16日～17日 於鳴武

○二日間参加者

▽徳島支部 堀江幸夫、田村清憲、柏原浩、馬場力、藤本辰夫、手塚十三子、糸田川美千男、松林保、▽鳴門支部 山田富康、伊賀上仙市、佐藤勇、菱田晋一、根上優、藤本雅史、浅野精一、吉田幸一、▽板野西支部 高田豊、高田亮、吉永明彦、元木武、糸谷文雄、河野美恵子、▽阿波支部 古川久美子、▽名西支部 高下正義、阿部全司、▽丹生谷支部 吉田租、白木崇、▽海部支部 張野久晴、▽刑務所支部 中村稔裕、鈴木伸一

○一日参加者

▽徳島支部 竹原常雄、西野四郎、小川本書、東内勉、森川澄、西岡金若、橋本武、南充美、岡崎明、忠津和憲、福島栄治、中村公二、谷本利雄、近藤康次、柳本巖、土井卓、鈴江俊和、栗野佳明、▽板野東支部 三木只雄、大野義則、野沢敬夫、▽板野西支部 岡島茂雄、▽阿波支部 一村喜佐男、坂本裕二、中尾誠、▽美馬西支部 三好正也、▽三好支部 来代眞治、▽麻植支部 植田一夫、川真田高太郎、明石貴仁、▽名西支部 美馬政雄、白木洋一、松田みつ子、▽小松島支部 田村直一、堀金實、▽阿南支部 清原栄、遠藤一美、▽丹生谷支部 上田雅文、佐々木和人、▽海部支部 平岡竹雄、美馬和義、▽警察支部 坂下彦之、松村克隆、米倉滋、▽刑務所支部 片山尊史

平成三年度 寒稽古 平成4年1月4日～6日 於中武

○三日間参加者

▽徳島支部 堀江幸夫、大澤孝彰、中川虎雄、西野四郎、東内勉、柏原浩、手塚十三子、東内守、手塚英治、▽鳴門支部 佐藤勇、前林利雄、▽板野東支部 三木只雄、▽小松島支部 蝦名久作、田村直一、▽阿南支部 福井軍二、玉田晋作、▽海部支部 中山啓男、▽警察支部 坂下彦之、松村克隆、▽その他 県立東工業高校剣道部、徳島文理高校剣道部、相生中学校剣道部

○二日間参加者

▽徳島支部 勝沼信彦、馬場力、森川澄、岡崎明、磯部洋一、福原栄治、嶋村謙、栗野佳明、▽鳴門支部 伊賀上仙市、竹内佳代子、▽板野西支部 元

木武、金西重記、▽三好支部 来代眞治、▽名西支部 高下正義、一、二、三、支部 堀金實、▽丹生谷支部 白木崇、▽警察支部 米倉滋、吉田昌彦、一、その他 徳島市立高校剣道部、徳島中学剣道部、徳島文理中学剣道部

○一日参加者

▽徳島支部 阿部国太郎、橋本武、石本芳照、松林保、柳本巖、池田武夫、高島弘和、森和夫、▽板野西支部 糸谷文雄、岡島茂雄、三木高雄、▽名西支部 久保隆司、▽小松島支部 田村義弘、西山伸二、有松京子、中尾青子、長谷川陽子、▽阿南支部 清原栄、遠藤一美、株木芳夫、芝原功一、土井司、阿部三十三、▽刑務所支部 鈴木伸一

# 平成三年度 戦いの跡

## 〔県内〕

### ◆第16回会長杯争奪高校剣道大会

(4月21日(日)徳農)

#### 〔男子〕

##### ▽準決勝

小松 島2(3)―(3)2富岡西

(代表戦)

城ノ内 4(7)―(3)1富岡東

##### ▽3位決定戦

富岡西 3(4)―(1)1富岡東

##### ▽決勝

城ノ内 4(8)―(3)1小松島

佐野 下川 添○

○西山 メメ― 佐々木

○山本 メメ― 松村

○佐藤 メメ― 切中

○二室 メコ 早川

#### 〔女子〕

##### ▽準決勝

富岡東 3(4) 21川 島

富岡西 3(4) 00小松島

##### ▽3位決定戦

小松 島3(4)―(2)2川 島

##### ▽決勝

富岡西 2(5)―(5)2富岡東

○宮本 メメ― 小藪千

中出 ―メメ 山崎○

海部 ト―メメ 谷○

森 メ引き分けメ 阿部

○吉岡 メ― 小藪香

○吉岡 メ― 小藪香

### ◆第16回山家旗争奪県下剣道大会

(4月28日(日)鷲敷町民体)

#### 〔中学校〕

優勝市場中学校 2位木頭中学校

〔高校男子〕

優勝富岡西高校 2位川島高校

〔高校女子〕

優勝富岡東高校 2位富岡西高校

▽五人以上勝ち抜き ○八人勝ち抜き

小松島高・大山美登里 ○七人

勝ち抜き 富岡東高・小藪千鶴 ○  
五人勝ち抜き 徳島市立・郡大介、  
新野高・泉保久、徳農・元木宣敏、  
富岡東・磯部健治、小藪香、阿南工・  
中山政人、川島高・中川昇、北川忠  
司

### ◆第31回徳島県高等学校総合体育大会

(6月1〜3日警察学校)

#### 第2日目

##### 〔男子団体〕

▽準々決勝 富岡西 3(4)―(3)2川島、

阿南工 3(5)―(1)1富岡東、小松島 2

(3)―(2)2那賀、城ノ内 4(6)―(2)1新

野 富岡西、阿南工、小松島、城ノ

内決勝リーグへ。

##### 〔女子団体〕

▽準々決勝 富岡東 5(9)―(2)0海南、

川島 4(7)―(1)1脇町、小松島 5(6)―

(0)0城ノ内、富岡西 5(8)―(0)0城東

富岡東、川島、小松島、富岡西決

勝リーグへ。

#### 第3日目

##### 〔男子団体〕

▽決勝リーグ 小松島 5(9)―(0)0城

ノ内、阿南工 3(5)―(1)1城ノ内、富

岡西 2(6)―(5)1城ノ内、阿南工 2(4)

―(1)1小松島、小松島 3(4)―(2)2富  
岡西、阿南工 3(4)―(3)2富岡西  
▽順位 ①阿南工 3勝 ②小松島 2  
勝 1敗 ③富岡西 1勝 2敗 ④城ノ  
内 4敗

##### 〔男子個人〕

▽決勝リーグ ①中野(富西)、磯

部(富東)、山室(城ノ内) ④山

本(城ノ内) ①位は2勝1敗得本

数4本同点のため3名で再試合 ①

磯部 2勝 ②中野 1勝 1敗 ③山室

2敗

##### 〔女子団体〕

▽決勝リーグ 富岡東 3(5)―(1)1川

島、富岡西 2(3)―(2)1川島、小松島

3(5)―(3)2川島、富岡西 2(2)―(1)1

富岡東、富岡西 3(4)―(1)1小松島、

富岡東 3(6)―(2)1小松島

▽順位 ①富岡西 3勝 ②富岡東 2

勝 1敗 ③小松島 1勝 2敗 ④川島

3敗

##### 〔女子個人〕

▽決勝リーグ ①吉岡(富西) 3勝

②小藪千(富東) 2勝 1敗 ③三

部(富東) 1勝 2敗 ④宮本(富西)

3敗

◆第20回徳島県中学校剣道選手権大会

(6月9日(日)鳴武)

3位 鴨島第一中学校、阿南中学校

▽決勝

市場 中2(3) | (3) 2 高浦 中

○佐藤 コロ | 近藤

○藤江 コロ | 横島

近藤 | コロ 片岡

坂木 | メト 高浜

瀬野 | 引き分け 富山

(代表戦)

○瀬野 コロ | 高浜

【女子団体】

3位 市場中学校、木頭中学校

▽決勝

那賀川中2(3) | 0 阿波 中

坪井 | 引き分け 大西

○大坂 メ | 有井

○高木 コメ | 畑山

陶木 | 引き分け 片岡

敷田 | 引き分け 湯浅

◆平成3年度四国高校剣道選手権大会

(6月15・16日徳島市)

【男子団体】

▽予選リーグA組 ①宇和島東3勝

②城ノ内2勝1敗 ③高松西2敗

1分 ④土佐2敗1分

▽予選リーグB組 ①阿南工2勝1

敗 ②高松商2勝1敗 ③高知学芸

2勝1敗 ④宇和島南3敗(順位得

本数)

▽予選リーグC組 ①松山北3勝

②富岡西1勝1敗1分 ③高松1

勝1敗1分 ④高知西3敗(2・3

位得本数)

▽予選リーグD組 ①高松南3勝

②松山西2勝1敗 ③小松島1勝2

敗 ④高知3敗

▽準決勝

阿南 工2(3) | (3) 1 宇和島東

高松 南2(4) | (4) 2 松山 北

(代表戦)

▽決勝

高松 南3(6) | (5) 2 阿南工

○低田 メメ | 西岡

○小野 メメ | 大城

矢野 | コロ 中山

○西村 コロ | コ 中田

武田 | メコ 杉本

▽予選リーグA組 ①富岡西3勝

②明德2勝1敗 ③高松西1勝2敗

④今治南3敗

▽予選リーグB組 ①高松商3勝

②済美2勝1敗 ③岡豊2敗1分

④小松島2敗1分

▽予選リーグC組 ①宇和島東3勝

②高松南2勝1敗 ③川島1勝2敗

④高知東3敗

▽予選リーグD組 ①富岡東3勝

②高知2勝1敗 ③南宇和1勝2敗

④香川中央3敗

▽準決勝

高松 商3(5) | (1) 1 富岡 西

富岡 東2(3) | (2) 2 宇和島東

▽決勝

高松 商3(3) | (2) 1 富岡 東

藤澤 | コロ 小篠千

川西 | 引き分け 山崎

○平林 コ | 名蔵

○田中 メ | 阿部

○谷本 コ | 小篠香

【男子個人】

▽準決勝

磯部 メ | 山室

(富岡東) | (城ノ内)

小原 ニ | 松山北

▽決勝

磯部 メメ | 小

【女子個人】

▽準決勝

松本 メ | 吉岡

(高知商) | (富岡西)

谷本 メコ | 小篠千

(高松商) | (富岡東)

▽決勝

谷本 ト | 松本

◆第12回徳島県女子剣道大会

(6月23日(日)中武)

【高校団体】

▽3位

川島 B

▽決勝

富岡東 A 2 | 0 小松島 A

【一般個人】

▽準決勝

四国女大 C 2 | 1 徳島文理大 B

四国女大 B 2 | 1 徳島文理大 A

▽決勝

四国女大 B 2 | 1 四国女大 C

【一般個人】

▽初段以下の部 ①林直子(板野西)

②小松里賀(徳島文理大) ③小林裕子(四国女大) ④福島美智子(徳島支部)

▽二段の部 ①横山典枝(徳島文理大) ②榎本幸恵(名西支部) ③萩野圭子(四国女大) ④森田香(徳島文理大)

▽三段以上の部 ①竹内佳代子(鳴門支部) ②石本真希(四国女大) ③手塚十三子(徳島支部) ④八幡美貴(徳島文理大)

◆第3回徳島県剣道選手権大会 (7月4日(日)中央武道館)

▽準々決勝  
近 藤 メ 富 浦  
(県警) (海部)

中 山 コ コ 米 倉  
(阿南) (県警)

平 野 ツ ツ 福 多  
(県警) (小松島)

平 尾 メ コ 藤 本  
(県警) (徳島)

二 野、 近 藤

◆第45回徳島県中学校総合体育大会 剣道競技 (7月21日(日)小松島体)

【男子団体】  
▽準々決勝  
市場 中 4 | 1 徳島 中  
那賀川 中 3 | 1 阿南 中  
鳴門 一 中 3 | 2 相生 中  
高 浦 中 3 | 2 鴨島 一 中

▽準決勝  
那賀川 中 3 | 2 市場 中  
高 浦 中 3 | 1 鳴門 一 中  
▽決勝  
那賀川 中 4 | 1 高 浦 中

【男子個人】  
▽準々決勝  
佐々木 コ コ 瀬 野  
(鳴門一) (市場)

吉 田 メ 佐 藤  
(山川) (市場)

泉 メ 米 倉  
(鳴門一) (阿波)

坂 本 メ メ 梶  
(市場) (北島)

▽3位決定戦  
坂 本 コ メ 吉 田 敷 田 メ コ 前 浦  
▽決勝  
泉 コ メ 佐々木 妹 尾 コ 坪 井

【女子団体】  
▽準々決勝  
那賀川 中 5 | 0 北井上 中  
市場 中 4 | 1 徳島 中  
木 頭 中 4 | 1 鳴門 一 中  
阿 波 中 4 | 0 附 属 中

▽準決勝  
那賀川 中 3 | 2 市場 中  
阿 波 中 4 | 1 木 頭 中  
▽決勝  
那賀川 中 2 | 1 阿 波 中  
阿 波 中 4 | 1 木 頭 中

【女子個人】  
▽準々決勝  
坪 井 メ 猪 尾  
(那賀川) (阿波)

前 浦 メ 有 井  
(木頭) (阿波)

敷 田 コ コ 湯 浅  
(那賀川) (阿波)

妹 尾 コ コ 大 西  
(市場) (阿波)

◆第30回全日本女子剣道選手権大会 県予選 (7月27日(土)中武)

▽準々決勝  
小 籾 香 メ コ 桃 谷  
小 籾 千 コ 吉 岡 久  
八 幡 メ 宮 本  
吉 岡 路 メ 近 藤

▽準決勝  
小 籾 香 コ 小 籾 千  
吉 岡 路 コ メ コ 八 幡  
▽決勝  
小 籾 香 メ 吉 岡 路

◆第22回徳島県少年剣道錬成大会 (8月4日(日)鳴武)

▽準々決勝  
那賀川 4(5) | 0 錬武館、  
阿南 5(8) | 0 徳島錬心館、大野 4(8)  
| (1)0 坂野、小松島 1(2) | (2)1 徳島  
右武館(代表戦)

▽準決勝  
阿 南 3(6) | 1 那賀  
大 野 1(3) | 2 小松島

三 南 1(2) (0)0 大 野

◆第16回徳島県剣道段位別選手権大会

(8月18日(日)鳴武)

【男子初段】

▽3位決定戦

原 田 メメー コ 兼 西

(文理高)

▽決勝

有 松 メメー メ 矢 代

(城ノ内)

【男子二段】

▽3位決定戦

磯 部 コメー 大 城

(富東)

▽決勝

山 本 ドー 小 林

(城ノ内)

【男子三段】

▽3位決定戦

宮 川 メー 馬 見

(丹生谷)

▽決勝

南 谷 メメー 井 利 元

(県警)

【男子四段】

▽3位決定戦

吉 田 茂 メー 島 田

(県警)

▽決勝

吉 永 コメー メ 藤 野

(小松島)

【男子五段】

▽3位決定戦

平 野 コメー メ 青 木

(県警)

▽決勝

吉 田 博 コー 福 多

(県警)

【男子六段】

▽3位決定戦

藤 本 メコー メ 白 木

(徳島)

▽決勝

中 山 メコー 鈴 木

(文理高)

【女子初段】

▽3位決定戦

増 金 メー 手 塚

(鳴門高)

▽決勝

笠 松 コー 田 島

(富東)

【女子二段】

▽3位決定戦

荒 井 メコー 林

(城南高)

▽決勝

小 籾 千 メコー 秋 山

(富東)

【女子三段以上】

▽3位決定戦

白 川 コメー コ 河 野

(板野東)

▽決勝

竹 内 コー 手 塚

(鳴門)

◆第6回徳島県高齢者剣道交流大会

(9月29日(日)中武)

【団体】

▽1回戦

小 松 島 3 (5) 徳 島 B

板 野 2 (5) 海 部

徳 島 A 2 (4) 名 西

阿 南 2 (3) 鳴 門

▽2回戦

小 松 島 3 (6) 板 野

阿 南 2 (6) 徳 島 A

▽決勝

阿 南 3 (7) 小 松 島

【個人】

▽A組(70歳以上) ①西野西三

②勝浦守 ③中川虎雄、早川一也

▽B組(65~69歳) ①高下正義

②浜田逸郎 ③遠藤一美 ④西山勝喜

▽C組(60~64歳) ①中山啓男

②雄西義春 ③佐藤勇 ④近藤康次

▽剣道交流試合

徳 島 3 (5) ー (2) 1 高 知

中 山 引き分け 寺 田

南 引き分け 浦 田

西 山 ー メ 大 石 ○

○浜 田 コー 岩 河

○美 馬 ココー 公 文

早 川 コ引き分けメ 門 田

○山 田 メー 依 岡

東 京 3 (4) ー (1) 1 徳 島

小 田 部 引き分け 株 木

鈴 木 ー メ 高 下 ○

白 川 引き分け 高 田 豊

○ 島 コー 遠 藤

○松 島 メメー 西 野

○藤 原 コー 蝦 名

東 京 5 (6) ー (1) 1 高 知

○小 田 部 トメー 寺 田

○鈴 木 ー コ 浦 田 ○

○白 川 メー 大 石

○島 トー 岩河  
○小田 コー 公文  
松島 引き分け 門田  
○藤原 コー 依田

◆第20回徳島県社会人剣道大会

(10月6日(日)鳴武)

▽準決勝  
徳大医虎2(5) 1阿南 B  
徳島刑務所4(7) 1鳴門  
▽決勝  
徳大医虎1(4) 1徳島刑務所

◆第36回徳島県高等学校新人剣道大会  
(11月24日小松島市立体育館)

【男子】

▽準決勝  
阿南 工2(4) 1(3)2徳島文理  
川島 3(6) 1(4)2小松島  
▽3位決定戦  
小松島 4(6) 1(0)0徳島文理  
▽決勝  
川島 2(4) 1(4)2阿南 工  
榎原 コー 1(4)2阿南 工  
○吉田 コー 1(4)2阿南 工  
白石 メ引き分けメ 大城  
坂東 1(4)2阿南 工  
○兼松 反 1(4)2阿南 工  
兼松 メ 1(4)2阿南 工

○栗栖 トー 山崎  
○秋山 メー 阿部  
横田 メー 1(4)2酒巻○

◆第16回徳島県中学校新人剣道大会

(12月1日(日)鳴武)

【男子】  
▽準決勝  
木頭 4 1 0 相生中  
嶋島 1 2 1 市場中  
▽決勝  
木頭 2(2) 1(1)1嶋島 1  
原田 1(4)2阿南 工  
○株田 メー 1(4)2阿南 工  
○橋本 メー 1(4)2阿南 工  
○小籾 引き分け 森山  
仁井 引き分け 堀江

○敷田 メト 藤本

◆第9回徳島県スポーツ少年団剣道大会兼第14回全国スポーツ少年団剣道交流大会予選会

(12月15日鳴武)

【男子】  
▽小学校4年 ①藤川卓也(竜虎館)  
②瀬口智(延野) ③小柏祐三(延野)、大前智二(大野)  
▽小学校5年 ①蛭原正基 ②儀宝正志(延野) ③谷口智映(大野)、尾崎文博(大野)  
▽小学校6年 ①福島聡仁(阿南) ②榎本裕司(延野) ③瀬ノ上尚(竜虎館)、森俊之(那賀川)  
▽中学生 ①日和田崇(山川) ②富田浩之(大野) ③森本春輝(海部川)、丸岡桂(海部川)  
▽高校 ①矢代潤(藍住) ②山田聡(藍住)

◆第36回県下剣道大会

(11月10日羽ノ浦総合国体)

【小学生の部】①延野剣道教室 ②高浦少年剣道ク ③阿南少年剣道教室  
【中学校男子の部】①阿南中学校 ②阿波中学校 ③相生中学校  
【中学校女子の部】①那賀川中学校 ②阿南中学校 ③阿南第一中学校  
【高校男子の部】①川島高校 ②那賀高校 ③小松島高校  
【高校女子の部】①小松島高校 ②三喜高校 ③富岡東高校  
【一般】①(1)阿南支部A ②小松島支部B

【女子】

▽準決勝  
川島 3(3) 1(2)2富岡西  
富岡 東3(3) 1(2)2小松島  
▽3位決定戦  
小松島 2(3) 1(2)2富岡西  
▽決勝  
川島 3(5) 1(4)2富岡東  
○田島 トメー 1(4)2富岡東  
横川 1(4)2富岡東

【女子】

▽準決勝  
那賀川 4 1 1 阿波  
阿南 1 1 1 市場  
▽決勝  
那賀川 4(6) 1(0)0阿南中  
○坪井 トー 1(4)2阿南中  
○賀川 トー 1(4)2阿南中  
○陶木 メー 1(4)2阿南中  
島田 引き分け 米沢

【女子】

▽小学校4~6年 ①榎本みくり(延野) ②平尾美海(阿南) ③遠藤律子(大野)、福永恵美子(竜虎館)  
▽中学校 ①陶木りえ(那賀川) ②西木奈緒(市場)

◆第25回徳島県高等学校剣道選手権大会

(平成4年1月15日城ノ内高体)

【男子の部】

▽決勝トーナメント1回戦

磯部メコ 川添

(富東) (小松島)

佐野ト 小林

(城ノ内) (文理)

兼松ト 福住

(川島) (小松島)

山本トメ 木下

(城ノ内) (小松島)

▽準決勝

磯部コ 佐野

山本メメ 兼松

▽3位決定戦

佐野メコ 兼松

▽決勝

磯部コ 山本

【女子の部】

▽決勝トーナメント1回戦

小籾コ 木下

(富東) (城ノ内)

秋山メ 大城

(川島) (富東)

▽3位決定戦

大城メ 木下

▽決勝  
小籾コメ 秋山

◆徳島県小・中学校剣道強化錬成大

(平成4年1月19日鳴門県民体)

【小学生の部】

▽準決勝

大野小 3-1 阿南少

延野小 2-2 竜虎館

(代表戦)

▽決勝

大野小 2-2 延野小

(代表戦)

【中学男子の部】

▽準決勝

市場 3-0 鷲敷

相生 2-2 阿波

(本数勝ち)

▽決勝

市場 3-0 相生

【中学女子の部】

▽準決勝

那賀川 5-0 市場

阿南 2-1 阿波

▽決勝

那賀川 3-0 阿南

◆第13回全国スポーツ少年団剣道交流大会

(3月29-31日国立オリンピック記念青少年総合センター)

【予選リーグ】

徳島5(9)-1(1)沖繩

大上 引き分け 平良

平尾コ 比嘉

森口コメ 佐渡山

湯浅メメ 唄川

敷田ココ 砂川

弘田ドメ 仲松

鳴滝 福原

徳島5(8)-1(3)栃木

大上メコ 堀江

平尾コ 小又

森口コメ 荒川

湯浅トコ 斎藤

敷田コ引き分けメ 田村

弘田 木村

鳴滝 引き分け 増淵

▽決勝トーナメント1回戦

徳島5(10)-1(4)滋賀

大上コメ 西津

平尾メメ 渕上

森口ココメ 青木

○湯浅トメ 増三

○敷田メメ 重森

○弘田トメ 西村

○鳴滝 西村

▽準々決勝

埼玉 A4(9)-7(2)徳島

○大島メ トト 大上

○難波メ 平尾

○中村メコ 森口

○三木 湯浅

○斎藤コメ 敷田

○野巻ココメ 弘田

○楠美メ引き分けト 鳴滝

◆第39回全日本都道府県対抗剣道優勝大会

(5月3日(祝)京都市立体)

▽予選リーグ

徳島3(5)-1(0)宮城

○白木メコ 岩手

○玉田コ 上総

○平野メコ 加藤

○藤本 武田

○那倉 引き分け 小林

○徳島4(7)-1(0)長野

○白木コメ 中野

○玉田 引き分け 大草

○平野メコ 原

○藤本 コメー 平林  
○那倉 コー 橋本

▽決勝トーナメント

奈 良3(3) | (1)1徳 島

○北村 メー 白木

○松田 コー 玉田

田口 コー 平野○

○稲葉 メー 藤本

上垣 引き分け 那倉

◆第43回四国四県剣道大会

(5月19日(日)高知県立武)

▽順位 ①香川3勝 ②徳島1勝2

敗 ③高知1勝2敗 ④愛媛1勝2

敗(2位以下得本数による)

◆国民体育大会第12回四国ブロック大会剣道競技

(7月21日(日)愛媛県武)

○各県対抗

【少年男子】

▽順位 ①香川3勝 ②愛媛2勝1

敗 ③徳島1勝2敗 ④高知3敗

【少年女子】

▽順位 ①香川3勝 ②徳島2勝1

敗 ③愛媛1勝2敗 ④高知3敗

【女子個人】

▽1回戦 吉 岡 コー 鬼 塚

(徳島) 小 籾 千 梅 小 島

(徳島) 吉 岡 メー 森 下

(福井) 分

敗 ③高知1勝2敗 ④徳島3敗

◆第38回全国高等学校剣道大会

(8月2日(金)~4日(日)御殿場

市)

【男子団体】

▽予選リーグ 市立岐阜商4(5) | (2)

1阿南工、鹿児島実3(6) | (4)2阿南

工

【男子個人】

▽1回戦

及 川 メー 中 野

(山形) 満 井 コー 磯 部

(島根) 野、鹿児島2(3) | (2)1富岡西

▽予選リーグ 富岡西3(7) | (2)0長

【女子団体】

▽1回戦 吉 岡 コー 鬼 塚

(徳島) 小 籾 千 梅 小 島

(徳島) 吉 岡 メー 森 下

(福井) 分

小 籾 千 梅 宮 山

(宮崎)

▽3回戦

渡 辺 メコー メ 吉 岡

(茨城) 小 籾 メー 中 村

(山梨) 小 籾 コー 小 原

(三重)

▽準々決勝

大 村 メメー 小 籾

(岡山)

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

分

▽決勝トーナメント準決勝

那 賀 川 3(6) | (4)1松 山 北

協 和 3(5) | (2)2香 東

▽決勝

協 和 4(7) | (3)1那 賀 川

江 崎 コー メメ 馬 淵○

○柳 萬 メト 賀 川

○溝 淵 コー 稲 岡

○吉 田 コー 大 橋

○大 西 メメー メ 光 岡

【男子個人】

▽1回戦 吉田(徳島) コー 渡

辺(香川)、舟橋(愛媛) メコー

米倉(徳島)、佐伯(愛媛) コー

梶(徳島)、泉(徳島) コー 丸本

(高知)、瀬野(徳島) メメー 高

橋(高知)、佐々木(徳島) コメー

白石(愛媛)、清水(香川) メー

坂本(徳島)、林田(香川) コー

佐藤(徳島)

▽2回戦 和田(高知) メ

(徳島)、羽田(香川) メ 野

(徳島)、佐々木(徳島) コー

本(香川)

▽3回戦 宮本(愛媛) コー

木(徳島)

【女子個人】

▽1回戦 吉岡(徳島) コー

森下(福井) コー

分

(徳島) 3勝 ②鏡野(高知) 2勝  
1敗 ③白鳥(香川) 1勝2敗 ④  
広見(愛媛) 3敗

▽学校対抗予選リーグB ①阿波  
(徳島) 3勝 ②久万(愛媛) 2勝  
1敗 ③協和(香川) 1勝2敗 ④  
大方(高知) 0勝3敗

▽決勝 トーナメント準決勝

那賀川 3(4) | (2) 1久 万  
阿波 3(4) | (3) 2鏡 野

▽決勝 那賀川 3(4) | (2) 1阿 波

○敷田 コー | 大西 波

○坪井 コー | 有井 徳

高木 引き分け | 片岡 木村

○陶木 メー | 畑山 有松

大坂 | コメ 猪尾 ○

【女子個人】

▽1回戦 猪尾(徳島) コー | 小林

(愛媛)、坪井(徳島) コー | 北隅

(香川)、白浜(香川) コー | 大

西(徳島)、中里(高知) メー | 前

浦(徳島)、山下(高知) メー | 湯

浅(徳島)、友沢(香川) コー | 敷

田(徳島)、玉井(愛媛) メー | 有

井(徳島)、篠藤(愛媛) コー | 妹

尾(徳島)

▽2回戦 猪尾 コー | 寺井(香川)、

末永(高知) メー | 坪井

▽3回戦 猪尾 コー | 末永(高知)

▽準決勝

猪尾 コト | 藤本

(愛媛)

岸上 メー | 友沢

(香川)

▽決勝

猪尾 トメ | 岸上

◆第8回全国家庭婦人剣道大会

(8月6日(火)日本武道館)

▽予選リーグ

徳島 2(3) | (2) 1長崎

木村 引き分け | 上田

○手塚 メー | 佐藤

有松 | メト 吉田 ○

○河野 メー | 西川

中尾 引き分け | 山下

大坂 4(8) | (2) 1徳島

○高本 コー | 木村

○三宅 メー | 手塚

○宮崎 コー | 有松

○横須 コー | 河野

竹中 | メコ 中尾 ○

◆第33回全国教職員大会

(8月8日神奈川県)

【団体】

大坂 4 | 1徳島

【男子個人】

○高校・高専・大学・教委の部

▽2回戦 福多(徳島) コー | 鹿取

(長崎)

▽3回戦 福多 コー | 塩澤(栃木)

▽4回戦 福多 メー | 教馬(東京)

▽準決勝

福多 メー | メ 軽米

(千葉)

坂田 メー | コ 栄花

(山梨)

▽決勝

福多 メー | 坂田

○中学校教員の部

▽1回戦 谷口(埼玉) コー | 榊

山(徳島)

○幼・小学校教員の部

▽1回戦 富浦(徳島) メー | 金子

(長野)

▽2回戦 富浦 メー | 白井(新潟)

▽3回戦 大塚(東京) コー | 富浦

【女子個人】

○女子教員の部

▽1回戦 古川(徳島) メー | 宮崎

(岐阜)

▽2回戦 古川 コー | 中塚(岡山)

▽3回戦 樋口(福岡) ツー | 古川

◆第11回四国教職員大会

(8月19日(月)愛媛県立武)

▽順位 ①愛媛3勝 ②香川2勝1

敗 ③徳島1勝2敗 ④高知3敗

◆第21回全国中学校選抜剣道大会

(8月19~20日佐賀市)

【男子団体】

▽予選リーグ 那賀川中1勝1敗

【男子個人】

▽1回戦 谷岡(山口) コー | 佐々

木(徳島)

▽2回戦 小池(広島) メー | 泉

(徳島)

【女子団体】

▽決勝 トーナメント1回戦

那賀川 5 | 0 宇ノ気

(石川)

▽2回戦  
那賀川 3 | 2 高千穂  
(宮崎)

▽準決勝  
那賀川 3 | 1 上峰  
(佐賀)

大 川 2 | 1 久万  
(愛媛)

▽決勝  
大 川 2(6) | (2)1 那賀川

牛之浜真 コーココ 敷田○

奥平 引き分け 坪井

○下 蘭 メトー 高木

○牟 礼 メメー 陶木

牛之浜道コ引き分けト 大坂

【女子個人】

▽1回戦 坪井(徳島) メコー

松下(奈良)

▽2回戦 高田(福岡) メメー

妹尾(徳島)、坪井 メコー 草野  
(埼玉)

▽3回戦 仲嶺(沖縄) メメーコ  
坪井

◆第30回全日本女子剣道選手権大会  
(12月1日) 小藪香(1勝2敗)

◆第37回全日本東西対抗剣道大会  
(9月29日(日)札幌市)

先鋒  
古川 メー 米倉  
(北海道)

▽1回戦 田島(東京) 判定 平野  
(徳島)

◆第39回全日本剣道選手権大会

◆第46回国民体育大会  
(10月13日~16日石川県)

▽1回戦 新潟3 | 2 徳島

◆岩手県知事杯争奪・第2回全日本  
剣道七段大会  
(11月17日(日)岩手県)

▽1回戦 名倉(静岡) メコー 近  
藤(徳島)

◆第12回中倉旗争奪剣道選手権大会  
(12月1日(日)にたち市総合体)

▽2回戦 福多(徳島) ココー 高瀬(富山)

高橋(京都) コー 近藤(徳島)

▽3回戦 福多コー 坂本(大分)

▽4回戦 武井(山形) ココー 福  
多

◆第8回剣道連盟対抗剣道優勝大会  
(12月1日名古屋市)

▽1回戦 徳島 3(6) | (3)2 宮崎

▽2回戦 新 潟 3(4) | (3)2 徳島

◆四国管内警察剣道大会  
(9月21日鳴武)

▽徳島 4(6) | (3)3 高知

▽徳島 4(6) | (6)3 愛媛

▽徳島 4(5) | (4)3 香川

順位 ①徳島3勝 ②香川2勝1敗  
③愛媛1勝2敗 ④高知3敗

◆全国警察剣道大会  
(11月8日日本武道館)

▽2回戦 徳島 5(7) | (3)2 山形

▽3回戦 徳島 6(11) | (3)1 山梨

▽準々決勝 徳島 5(7) | (4)2 北  
海道

▽準決勝 埼玉 5(9) | (3)2 徳島  
(全国三位)

◆管内警察剣道選手権大会  
(平成4年3月17日四管学校)

○30歳未満  
▽決勝 旭(香川) ドメー 吉田茂

○無差別  
▽決勝 松本(香川) メー 吉田博



発刊日 平成四年五月十六日  
発行所 徳島県剣道連盟  
編集 徳島県剣道連盟広報部  
印刷所 グラウンド印刷